明治三十六年八月二十四日發刊

女鑑

第百三拾八號

東京國光社

女鑑第百三拾九號

目録

淨智尼



人生婦人の身となる事なかれと云ふに就きて

「人生婦人の身となる事なかれ、百年の苦樂も他人による」とは、唐の白樂天が吟じたる有名の詩にて、女子の運の、たゞ、偏に、夫のよしあしによりて定まるをあはれみ嘆ぜし句にて、よくも婦人の身をうたひたるものかなとて、和漢、古今、共に之を唱していみじき名言となす所なり。不幸の女子を憐みたる詩人の情や誠に面白し。然れど、もし、世間の婦女にして、斯の如き嘆をいふ人あらば、大にあやまてるものと云はざるを得ず。婦人の苦樂、時には男子にはよる事もあらむ、されど、婦人の苦樂、果して必ず男子にのみよりて定まるものなりや。或は不幸にして苦しき境に沈むこともあらむ。されども、それを以て、徒らに婦人の身となりしを嘆きてのみやむべきものにや、いかでさる事あるべき。いかならん苦境

に沈むとも、我が心のもち方によりて、苦境の中にもよく自ら樂むを得るのみならず、他人の苦境の中にて、能く樂しき天地を作りやるを得べし。さるは、學なく、才なく、力なく、あきらめなき婦人の心にして、才あり學ある日の本の婦人、何ぞさるはかなき心をもつべき。夫かしこかりしとて、如何で、いたづらに安逸に過ぐさるべき、夫れろかなりとて、また、何ぞ苦しみのみせん。そも夫と妻とは、もと、天と地との如く、龍と雲との如く、鵬と風との如く、水と魚との如く、二つ相まつて、事をばなし得るものにて、龍如何に靈なりとも、雲の助けなくば、いかで、そのよく天にのぼるを得ん、鵬如何に大海を志すとも、風の伴はずば、如何で、よく南冥に至るを得ん。龍と雲と、鵬と風と、皆、共にたもちて、よくその大事をなし得るものなり。人間も之とひとしく、智德兼備の夫あるも、妻、安逸として、之が助けをなさずば、それまた何かはせん。智德の男子ありて、外をよくつかさどり、貞實の婦人ありて內をよく治め、夫妻相まつて、內外、はじめて、完全するものなり。故に、一家の苦樂は、男子にのみよるにあらず。

婦人の苦樂は、男子にのみよるものにあらず。良人德なくば、妻之を補ひ、良人才なくば、妻これを補ひ、良人怠惰ならば、妻自ら勵みて之をすゝめ、良人無情なるも、妻よくこれにまめやかに仕へ、以て一家の幸福繁榮を心かくるが婦人の任なり。

國に爭臣三人あれば、君不道なりと云へども、その國亂れず、家に爭子一人あれば、父無道なりとも、其の家亡びずと云へり。一家の婦人たるものが、よく美はしき德をそなへ、美はしき心をつくし、まめやかにやさしく身をつくして、よく一心に其の家を治め、夫をたすけ、かしづきなば、いかでか、一家の幸福を作るを得ざるべき。これ、實に婦人の務なり。

よく此の務をして、欠くる處なくば、たとへ如何ならん苦しき悲しき境遇に沈むとも、よく女子の任をつくしたるものなれば、また、婦人の身として更に悲しむことも、苦しくればゆることともなかるべし。

世に、徒らに、男子の玩弄物と成りて終るべき僞婦人の苦樂こそ、他人にもよる

べけれ、世のため、國のため、家のためなす處あるべき眞の婦人の苦樂は、婦人自らの心のもち方にあり。婦人自らの苦樂のみにあらず。良人の苦樂、兒童の苦樂、一家の苦樂も、また、實に婦人による所あるなり。樂天の詩に就きて思ひ出るまゝ。



論説

高等女學校設立に就きて

坂本三七郎

各地到る處、尋常中學校の設立を見ざるなく、多き者は六七校、少きも尚二三校の設あらざるなし。文運の進歩人智の開進、實に喜ぶべくして又驚くべし。是に繼て起りしものは、高等女學校となす。七八年來、死灰殆んど燃るの氣なく、沈底不振の地方女子教育、一片の訓令と倶に勃如として興り、各縣爭ふて女子高等學校を建立し、其の

甚しきに至りては、女子大學校を設けんとする者あるに至る。嗚呼、又盛なりと謂ふべし。然りと雖も、吾人の憂苦する所の者は、各府縣、今日、中等敎育學校の風潮は、一の流行に走るの傾向あり。彼一校を增加せば、此に二校を設立し、學校設立の多きを以て、敎育進歩の標準となして相誇る者たるに似たり。地方稅の負担、果して之が負荷に堪ゆるか、敎育の道たる、豈、皮相的を以て行ふべきものならんや。後日或は傷くなきを得んや。然れども、此事たる、今、女鑑に於て論ずるの要なし。吾人は、今、各府縣高等女學校が設立に就て前途の杞憂を懷くものなり。

八九年以前、女子の敎育如何なりしを知らずや。敎育の方針未だ其道を得ず、國家的敎育蕩して振はず、米風に梳りて歐波に浴す、之が爲に、螺髻洋裝の女學生に非ざれば、蓬髮博帶の驕慢女生なりき。是に於いて、舞踏會場は自由結婚の媒となり、音樂會の歸途手を携へて來る雙々狂蝶あり、甚しきに至りては、敎員にして自ら自由結婚の媒介を爲せるものあるに至れり。此等の事、吾人は親しく世人と觀來れることならずや。某氏が某校長たる時、余は唯阿轉婆女子を匡正せんのみと絶叫せしは、實に七八年以前の實況なりき。之が爲に、地方、心あるの父兄は、最愛の女子を是等の惡風に感染せしむるを欲せず、續々女學校の門に來り、女兒を携へて歸り、都下女學校の門前は、

殆んど閑却として雀羅を設くべき有樣にして、地方の女學校も亦從て廢せられ、爾來今日に至る迄、女子中等教育は、半ば耶蘇教等の宗教に依て、僅に命脈を維持せられたるは、世人と倶に目撃したる事實ならずや。

然るに、七八年後の今日に及んで、高等女學校の設立、各府縣至る所に觀るに至る。是れ、女子教育の必要社會に起り、迫りて訓令となり、發して各府縣下の設立となりたるに基因し、又一方には、國家的の教育大に天下人士の必要を感せしめ、今日都下の女教師、女學生を見るに、大に七八年前の風儀を變し、稍々吾人の意を滿たさしむる者あるは、教育の道次第に其の方法を得たるに依らずんばあらず。吾人は甚だ之を喜ぶと雖も、十年以前の女教師、女生に對比せば、所謂彼此より善は即ち之ありと云ふのみ。今の女子教育、豈、此の如くにして已む者ならんや。

之が爲に、今日、各府縣高等女學校の設立に就きて、吾人が杞憂を懷く所のものは、女教師傭聘の事にあり。女教師の良否は一校の教化に關し、一校女德の高下は後來一郷一縣の風化に及ぼす、今日、林の如く立ち潮の如く起る幾百千の女學校、學德の素養ある女教師を以て、之を支配せしめざるべからず。之を始めに愼まざれば、一校の弊風は後日に至りて鋤治すべからざるに至らんとす。然れども、今日、地方幾百の女學

校、悉く學徳を備ふるの女教師を得るは最も難事にして、假令學徳を兼ねる者ならざるを聘すとするも、需用者の求を滿す能はざるは、今日の實狀然るなり。彼は傭聘に急なれど、之を採擇するに疎なるは勢免るべからず、從つて學問を觀て、他に大瑕瑾あるを知らず。而して其の人を求むるは必らず都下に於いてす、都下の女流を以て地方に臨む、性情の醇否、風俗の良否、相反する、啻月鼈のみならず、若し女教師にして其の人を得されど、地方の女學校、恐くは又第二の七八年前の於轉婆女流を現出せんとす。故に、今日地方の女教師を撰むは、寧ろ學問の深からんよりは、女德圓滿の女子を得んことを切望す。

吾人は久しく都下に住し、後去て地方に遊ぶ。其の女子に對し婦女子に接するに、質撲勤慎、學薄しと雖も、女德の高風に至りては、吾人をして歎賞已む能はさらしむ。言語は野鄙なりと雖も、信實其の間に在り、衣服綿布なりと雖も、清楚愛すべし。若し、不幸にして女徳に薄く、輕浮都風に驕るの於轉婆女教師をして之に臨ましめど、吾人は、第二の國民を養ふ良妻賢母を賊して、國家深底の大害を生ぜんことを恐る。殷鑑遠からず、七八年前に在り、七八年前の害は其の害の及ふ所狭かりしと雖も、今や地方至る所に設立あり、一轍を失すれど其の弊知るべからず。吾人は地方女學校の爲に之を

憂ひて、其の採擇を戒め、且地方女教師たる人に向て、前途の重任を切望し、一篇を寄せて之を規す。

女子教育一斑（四十七）

三輪田眞佐子

（其八）女子の學制

女子は如何なる學校に於て如何なる學課を教ふべきかを定むるをこそ學制といふなり。されど、學制は、教育の形式にして、その組織宜しきを得ざらむか、完全なる女子教育は望むべからず。故に、こを研究するこそ切要なれど左にその概略をものせん。

女子教育は、胎教、及び家庭教育を以てその基礎と爲すべきものなれど、本論は學校教育を説くべければ、これらのことは省かむ。そも〳〵、女子學校教育の始は小學なり。そは、兒童の腦髓いまだ熟せずして、いと感化し易き時期の教育なれど、人品を養ふ點より言へど、最も注意せざるべからず。蓋し男兒は、そが家、地位高きものは、小學を出づるも、なほ進みて高等の學につき、若しその家貧賤ならむも、外に出でゝ業を執るべけれど、所謂社會の事情より鍛錬せらるべし。されど、女兒は、小學を卒ふれど學ばざるもの多きのみかは、その世界は、殆ど一家なれど、見聞も多からざるを以

て、小學にて得し智識、及び道心こそ其が立世の指針なれど、女兒教育につきては、小學より男兒と大に趣を異にすべきなり。されど、女子小學の制度につき言はまほしきふしもあれど、本論の目的にあらざれば止みぬ。

苟も國民たる以上は、如何なる下等社會の女兒なれども、小學教育だには施さゞるべからず。なほ、中等以上の社會に地位を占むるものは、更に高程の教育を受くべきものぞかし。然らざれど、日進文化の世中に立ちて、あるは良人を補佐し、あるは兒童を庭訓することも能はざるのみかは、日時の家業をさへ圓滿に行ふこと難かるべし。されど、かゝる程度の女子教育を、女子尋常教育と名づくるこそ當然ならめ。尤も今日までは、女子教育いまだ幼稚なりしかど、これに相當する女學校を、高等女學校と稱せしかど、その名の改まるべきも遠からざるべし。既に中等以上の社會に於いては、高等女學校卒業を以て、普通の教育となし、婚嫁の必要條件となすもののごとし。

勿論、我が國に高等女學校の設立ありし以來、幾多の年月を經れど、幾分の經驗あるのみならず、海外の學制を模擬し、若しくは當務者の理想を以て學制を作りけんにや、一暼善美なるかの如く見ゆれども、實際如何はしき點少からざるとぞ人はいふ。由りて、されば、その學課につき聊か述べてん。

倫理、一時は女學校にも、西洋の倫理を講ぜしこともありしとかや。そは哲學の一種にして、親の義務、子の權理などの學說あれど、彼國にてはこれを科學とし巧に研究するも、實踐の如何を問はざるものとかや。蓋し道德の實行は、多く宗敎に由るを以て、さることも妨げなからむ、なれども、これをわが國に移し、科學として倫理を敎へんか、愚なる業にこそ。

わが國今日の現狀を見れど、國民の道德を導くに足るばかり勢力ある宗敎なきのみならず、國體、及び民心につきて考ふれど、宗敎は各自の信向に委ねんも、一切國民たる女子は、普天の下、率土の濱、耶蘇黨にまれ、佛敎信者にまれ、將た無宗敎の人々にせよ、かしこき敎育勅語に基づき以て敎育の眼目を定め、なほ、固有の歷史を以て、大和民族の經典となし、これを補ふに儒敎を以てすべし。元來、儒敎は、孔孟の祖述せし道ならむも、そは專ら實踐すべき人道を說き、怪力亂神を語らず、亦厭世の分子を含まず、唯、自然の理勢に從ひ、臣としては忠を敎へ、子としては孝を敎ふるなど、實にわが國情と一致するものなれど、わが國民のため最も適切の敎なりかし。

或人曰く、儒敎は他國の敎なれど守るに足らずと、勿論孔孟は支那に生れしかど、決して宗敎家のごとく、わが門派を開く目的にはあらで、唯、虛心もて人道のしをりを

なし丶先覺者あれど、などか他國の教義をわれに移すものとやは言ふべき。實は、往昔より儒教の行はれしは、かれ支那にあらずして、我が日本なりと言ふも可ならむ。況して儒教のわが朝に渡來せしは、應仁天皇の十五年なりけれど、既にわが國民は、遺傳的にその教と相離るべからざるのみかは、おのづからそをわが國情に同化せらるゝ傾向もあれど、最早これを稱して日本教と言ふも言ひ得ん。

兎まれ角まれ、おのれは、日本國民てふ精神を守りて、女德を發達せしめんと思ふなり。故に、女學校に於いて女德を養成する方法は、善良の校風を起し、これに感化する外ぞなかるべし。わきて倫理を講ずるには、神聖なる講堂を設け、これに入るや、我が國の至尊を敬し奉るは更なり、なほ、わが史上の摸範となるべき女傑の肖像を四面に掲げ、これを欽仰しつゝ、わが國体の大道に基き、傍ら聖賢の明教を加へ、過去、及び現今なる烈女貞婦の實歷を交へ、これを講ずるものは、校長、若しくは有德の婦人と定め、凡そ一校の女生を、二組、あるは三組など適當に合併し、氣爽かに心いまだ倦まざる早朝を以て、能ふ限り他の教師も講堂に列席し、生徒の衣帶、束髮、言語、動作、一切の外容にも注意を與へ、靜肅に女道を講し、知らず識らず、高尚の、純潔の、溫厚の、あるは親切なる氣風を作らしめ、これより至善の域にみちびくべし。

實に、尋常學校の目的は、學術研究するにあらずして、良妻賢母の素養を爲すべきものなれば、その師たるものは、平素の節義禮讓は更なり、その心と行、ともに女生の模範となり、つねに教ふるや、さながら慈母の赤子を見るごとく懇切なるべし。あはれ教師と生徒の間、行路の人も啻ならざる今の世に、かゝる德育法の實踐し得るか否やは疑はしきものなり。昔子貢が、夫子は聖なるかと、孔子に問ひければ、孔子のたまひけるやう、聖則吾不能我學而不厭教而不倦也と。試に今の世の師位を占むるものを見よ、資格てふ人爵に安せず、益々まなびて厭はざるものの幾人かある、否々俸祿のみを目的として教ふるものなきか。若し然らば、倦まざることも、などか望むべき。故に、女子の德育を言ふものは、單に教育を受くる女生に求めんより、更にそが師たるものゝ天爵を撰びね。荀子曰く、蓬生麻中不扶而直と、げにさることぞかし。

(宣長)

すめかみの
めぐゝおもほす
ひとぐさぞ
よのなかのひと
あしくすなゆめ

史談



荷田蒼生女（續）

壚井ふく子

民女、性いと明朗俊邁にして、心をゝしく、いさゝかもたをやめのくね〳〵しきならはしなく、また、かつて、己れが志をまげず。その身祠官の家に生長れるによりて、生涯外神を祈らず。されど、其家、佛寺に隣れりしかど、一度もゆきて之に詣てし事なかりしとぞ。その死にのぞみて、兄の弟子、平澤元愷來りて、その著述を問はれしに、刀自はゝ笑みて、また、これ、造化に復さんのみ、何ぞ世に傳へんやと答へけるとなり。されど杉のしづ枝といふ家集のみは殘りて、いとめでたく世にもてはやされぬ。此刀自、また、品位をおとさず、みだしなみかつてくづせし事なく、例へ病にふすとも、人のおとづるれど、まづ髮をくしけづり、衣をあらため、亂れたるさまを見せし事なかりしとなり。そのよみける歌は、誠に男山のをゝしく、調高く、心をかしく、むかしの小野、和泉にもをさ〳〵おとらざるふし〴〵多かり。

む月朔日春たちけれど

むつきたつけふを始によみそむる春の日數は長くもあらなん

としのあしたによめる

明けぬとて名のる鳥のこゑのうちに山際かすみ春はきにけり

四十に成けるとしの春のはじめによみ侍ける

けふよりは老といふ名をおはすなる年とはしれど春ぞ嬉しき

春のはじめの歌とて

あだなりと人は云ふとも此の春は花に心ろを染めつくしてむ

老いぬとてこゝろはなどか花鳥の春のいろねを思ひ捨てめや

遠山霞

ふりさけて見るものどけし筑波山葉やましげやま霞わたるを

春の夜月を見て

見し世にはにるべくもあらぬ春ながら月の憐ぞかはらざり鳧

歸雁春知

こちふけたかりかへるなり小山田の雪げの水に時を知りてや

春述懐の心を

みだれつゝ物思ふころは常よりもうちまもらるゝ青柳のいと

櫻を植う

うゑて見る花には風を厭ふかな熟れを先きと知らぬ身ながら

關路花

香とかりはせきもるひともゆるしてや明石に通ふ花のはる風

春鐘

入あひの鐘は春しもうかりけりはかなさ見せて花の散れゝと

五月雨のころ述懐の心を

春雨は花を見つゝもなぐさめきせんすべ知らぬ五月雨のころ

早苗

語らひてとるもむつまし妹と背の山田の早苗たのみありげに

撫子を折りて人にやる

はらはねと思ひもちりもつもりけり我がひとりねの床夏の花

夏思を

花にいとひ紅葉にうとむ風をしも思ふぞ夏のこゝろなりける

池蓮をよめる

いけ水のいひしらぬまで香るなり蓮のうき葉に風わたるころ

八月十五夜海邊の家に月を見るといふ事を

こゝろある海士のとまやに宿かりて此の浦島の月を見るかな

月前思を

うち向ふ月はひとつの影ながらうかぶは千々の思ひなりけり

秋のふじを

不盡の根に登りて見ばや秋の月手にとるばかり近からましと

二星適逢

近からばゆきても見まし棚機のまれのわたりの船のよそひを

松の下落葉

ふゆなれや常磐のまつの下蔭によその落葉をさそふ木がらし

網代寒し

埋火のもとにも風をいとふ夜に網代もる身もあればありけり

春懐舊

松の葉の若むさしそふはる毎に植ゑてし人のむかしをぞ思ふ

夏懐舊

思ひきやさらでも我はさ月やみはるゝ時なきなげきせんとは

秋懐舊

わきされむ有をも戀ふる夕べ〳〵ふりにし人を忍むさちめや

冬懐舊

わかざりしその夜の月を忍ぶれむむなしき空に木がらしの聲

寄鐘述懐といふ事を

きぬ〳〵に怨みしこともわりし世を今は數ふるあかつきの鐘

古寺嵐を

吹きはらふ松のあらしのなかりせむくもにうもれん峯の古寺

古郷なりける稲荷山の近きわたりに立ち

歸るといふ人にことづてをだにとて

わけて云はん言の葉もなし稲荷山やまずこふると人につげてよ

母君におくれし時

先だゝん事はいとひし露の身もおくれんとはた思はざりしを

父の三十三年に

君が跡を慕ひもゆかでちゝのみのちゞに悲しき世をもふるかな

兄の三十三年に

一日だにみねむと思ひし君なくて三十三とせのあきもへにけり

物思ふ頃いつしか秋になりぬと人の云ふを聞きて

一葉よりさきに我が身もさそひなむ世に秋風の立もしらじな

宇津山

年ふれむ夢路もとはきうつの山うつゝにこえし事もありけり

みちのくの宮津をしろしめす中將の君につかふまつる越智直陽ぬしの古郷に立ち歸り玉ふ時みやびたる草々をつとへ入れて參ゐらすとて桐もて長き箱を調じたりしそのふたのおもてに書つけける

みちのくの忍ぶ種にと武藏野のくさ〴〵をしも見するなり鳧。なは、いみじき歌のみ澤にて、ひろひつくすべくもあらず、文もまたあやにめでたしと思ふが多けれど、此處にはのせずかし。さるにても、刀自よ、早く夫を失ひ、若きみどりの操をもかへず。また姿もかへず。さりとて、また、親の家のかへり人ともならず、なげきあまりて天命を失はんともせず、たゞ和歌の道をきはめ、荷田氏の家風を振ひしは、誠にめでたき國學者の娘の面目をたもちし才女にこそ。

淨智　　五十　園徳文

淨智は長崎の人友田某といへるが妻なり。はじめ一人の女の子を生めり。この友田某が弟はやく身うせて、二人の子をのこせり。某その長の子をとりて養ふ。妻この子をあつかふこと巳が生める子の如し。やがて人となりて、業をつとめず身持放蕩にして、人のいさめをも用ゐざりけれど、某も困じて遂に家を逐へりき。その後ほどへて妻夫某に言をすゝめていへらく、君よはひかたぶきて、いまだ子なし。今がうちに代つぎの計おはせずは、老て後せんなからん。願くは妾一人をめしたまへとて遂に妾を納れしめたり。妻これを遇することあつくして、いさゝかもうはなりねたむ心なし。人みな

感じあへり。いくだくもなくて子一人をうめり。妻いたくよろこびておのがうめるに異ならず。後又一人をうめりしかど、妻いよ〳〵よろこびて、家のことゞもはみな妾にまかせ、おのれはみどりの黒髮そりおとして尼となりて淨智といひき。かくて後は世をはなれて、寺にまうでゝ、佛ををろがむをのみ事とせり。正德のはじめのころ年七十路にて身うせにき。淨智嫁して子なく、夫にすゝめて妾を納れ、子をまうけしめて、さて家をつがしめ、おのれ出家していさゝかも妬心なし。かくて潔く一生を終ふ。すぐれたる婦といふべし。世には嫁して子なく、婦德さへをさまらずして、夫の身持たゞしきにも、われと邪推をめぐらして、ろねみねたみを逞しくし、なぎたる家の裡に、しひて浪かせを起すものもなきにしもあらず。この淨智を見ていましめとせよ。

ゆふかげにきなく
ひぐらし
こゝたくも
日ごさにきけど
あかぬこゑかも

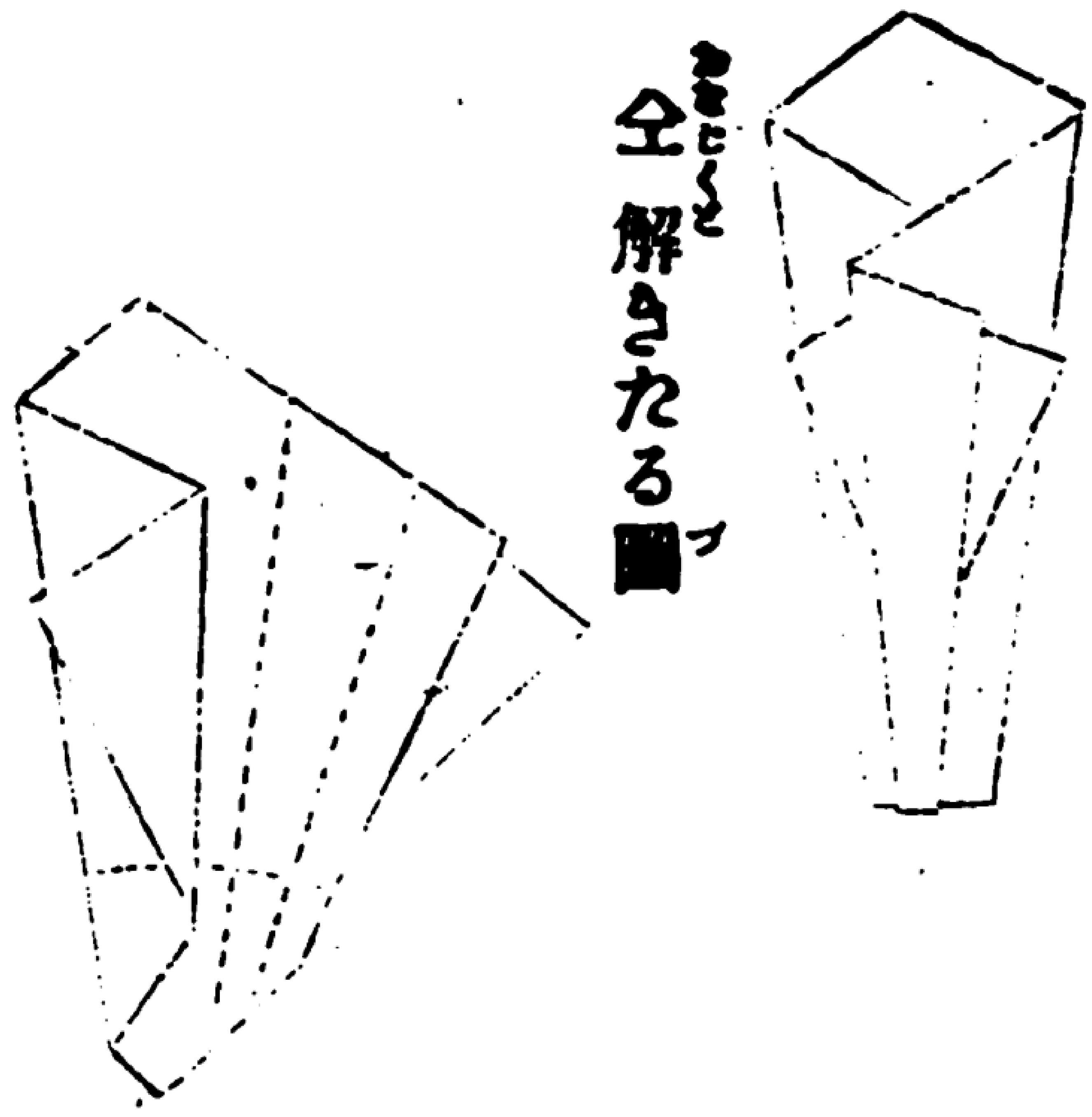


家政

折形

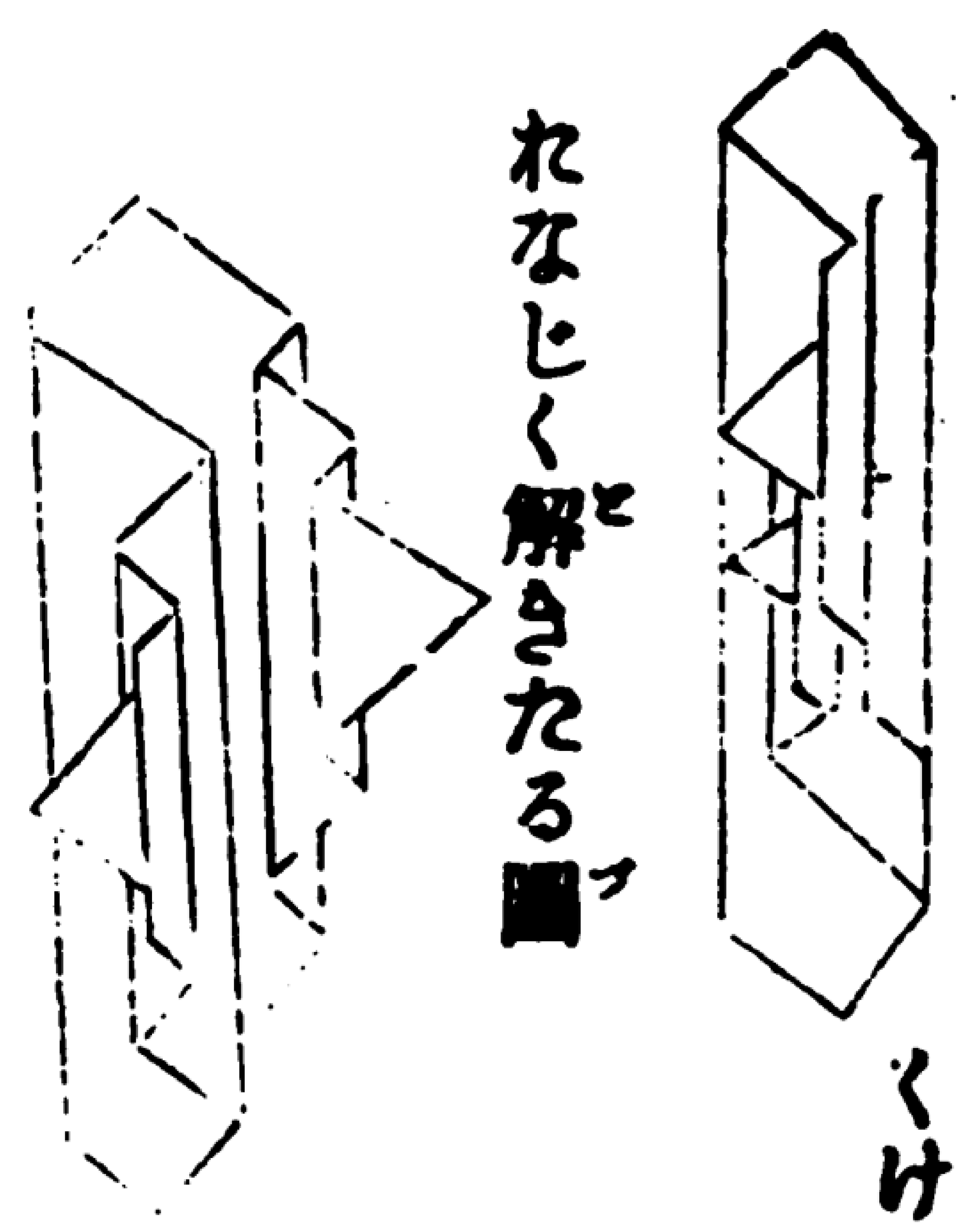
有住齊

草の末廣包



全解きたる圖

眞の帶包



縁帶包　ゆひなふの帶を包むなり。くけおびなり。

おなじく解きたる圖

茶の湯

薄茶平手前（或は運手前と云）

關　草雄

一服の薄茶を點るに望み爰に一言すべき事あり。着物の上にて、劈頭より水指を持出し點得べきものにあらず。第一に座敷の掃除をなし、塵埃を能

拂ひ、次に風爐の置場を定め、灰を直し、炭取を持出し、炭を置、下火を入、釜を洗ひ、濡れたるを拭ひ、風爐の火移りたらむ香を焚、釜をかくべし、床の掛物をかけ、花入を置、或は掛花を生、水を繼、客を接待するの茶具を取揃へ、茶菓を用意し、水屋の拵方等大に習ひこれある者也。又飲食の料理なし。外向に路次庭前の掃除をよくし、水を打、其他の事柄故實習ひある事を詳細に教授するには一朝の事にあらず。紙數も數十枚に亘りて繁雜を極め、初學の女子等には解し難き場合もなきにしもあらざるべけれど、先此段は暫く預りおきて、薄茶炭繼、濃茶の手前所謂稽古第一にせんとすに掛るを急にせんと欲す、其順序は號を追ひて掲示するを見給ふべし。

水屋拵方

前號の割稽古相濟、而して後一服の薄茶を點んと欲するには、行水を遣ひ、手を洗ひ、口を嗽ぎ是則利休居士七ヶ條の中に手水の事專ら心頭を嗽ぐを以て此の道の要とすとあり唯に手を洗ふにあらず心神を洗ひ心持淨清にせよとの深切なる教語也次に水屋に至り、蹲居して第一に帛紗を腰に差狭むべし。此付方は割稽古の條に示したるがごとし次に茶入の茶を改む。是則棗にても中次にても其他の物にても同し茶器中の茶崩れ見苦しきことあらは掃をなすへし次に茶碗棚にある點せんと思ふ茶碗を取り、茶巾盥の中にて洗ひ、水屋の布巾にて拭濟むべし。其茶碗を簀子の上に置、茶巾盥の中にひたしある茶巾の片隅を取りて能く振灑ぐべし、而て左右の手にて引張、右の手にて向の方へ二つ三つ捻り、其儘二つに折り、一つにして右の手にて持、左手下の方を持、二つに折たる所を持、是にて四つ折になる左右の手にて捻り、含みをる水を絞り去るべし。但し成丈能絞り水氣すくなきを要す次にひねりを戻し、四つ折たるを左右の手にて一つ廣げ、又一つ廣げ、其儘左

右の手にて引張れた、持餘しある二つの隅びらく
を出づるものなり。是を向前に是迄持餘りたる中指
以下三本の指先にて向前に引延し、先づ向の方を能
く延し、右手を放し、左手の側を持ち左手を向の隅
へ送り引延し、又右手を放し、左手の側へ送り、左
手を向の隅へ送り、持引き張り延すべし、是にて三
方廻り、皺能延盡るもの也。但し茶巾地麻布巾横になる 而して左右
の手、中指と名差指の間に狹み、三つに折て見積り、
向へ一つ折、又向へ一つ折り、是にて三つ折になる 直に左手の
親指へかけ、帛紗さばきの節の如くにして二つに折、
両方の端を引き揃へ、左手の中指薬指の頭にかけ、
下の方へ一つに折、右手にて持、左手茶巾の間の中
指以下をはづし、又右手にて三分の一を裏の方へ折
り付くべし、直に左手の親指をぬき、茶巾を右の手
に持、清め置たる茶碗の中へ入、但し三分の一折たる方を上へなし入べし 次

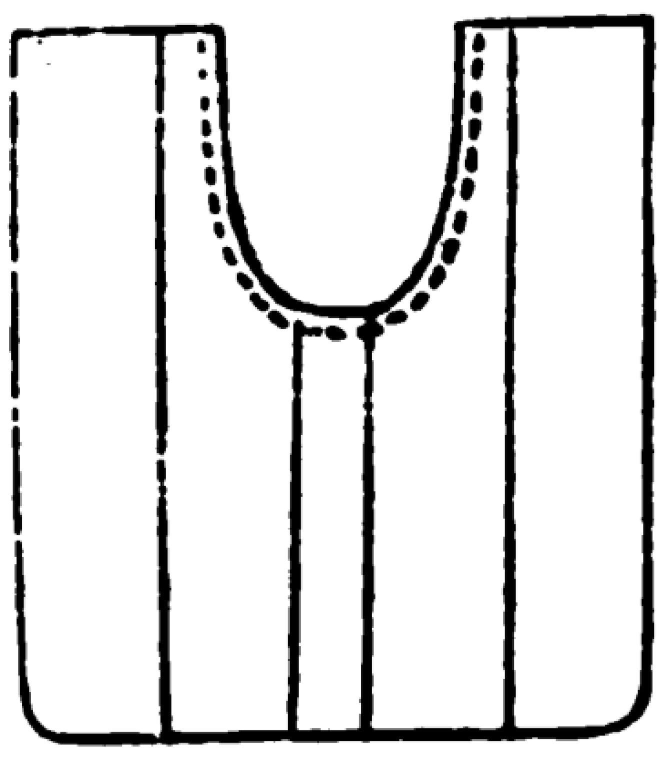
に茶巾盥の中に濡し有る茶筌を取、振ぞゝぐへし。
引き上げ振りて水を切り、穂先を改め、但し折れ損若又付たるものあらば取除くべし 茶筌の結目の留を見て下の方へなし、穂先を茶
巾にてあひしらひ、軸の處を茶碗の縁へかけて茶碗
の正中へ入れ、其半分の右の方の眞中へ茶杓を俯せ
て眞直にかけ、但し茶碗向前の縁へかくる 一旦水屋の茶碗棚へ假に
上げ置くへし、次に水指の水を入、但し九分目 水指の前の
方、又客付を見定め、但し薬の濃淡又は形ち方圓曲直自ら前の方にすへき約促有之もの也 蓋
を拭ひ、盆付の雫は水屋の布巾にて拭ひ、簀子の上
に置くへし、而して〓を改め、中に蓋置を入、但し初心の中はさらし竹を用ゆ 次に柄杓を茶巾盥にて能清め、柄の元迄ぬら
し、〓の縁へ合の中程を掛、柄は前のふちへ直眞にか
け、簀子の中に見計置くへし、濡たる手は水屋の手
拭、或は袂の手拭にてふくべし。

たちぬひ

西山たい子

袴の縫ひ方(つゞき)

さて裾絎、左右ともに絡らば股の番を縫ひ合すなり。但し縫目は後も前も股の方へかへし、襠のつけも、後前ともに襠の方へかへし、相引は前の方にかへすべし。股の番を、ぬひ合するには、左右の襠のぬひめより丈けをよく合せて、まづ表面の方にぬひ代を出して、あまりぬひこみを深からずぬひ合せて、ひきかへしてうらより再び袋縫になすべし。四ッ身、三ッ身等の背縫をせしるなり。但し、此の如くするなり。即ち下圖の∪の處をぬひ合す



股の番は、きはめすれる處にして、きれやすき處なれば、丈夫にせんために、切れの耳、或は、眞綿の耳等をぬひつけ置けば、丈夫なり。ぬひ絡らば、股の端より、四寸二三分ばかりの處を、相引のぬひめよりより、斜に内へ折り、之より襞積をとるなり。

そのひだをとるには、まづ穿きて左になる方を、襠の眞中と後の奥布とのぬひめに折をつけ、前を上にして、相引のぬひめより、凡そ五寸ばかりの處に折りをつけ、次に前の脇布と奥布とのぬひめを、二三分内へ入れたる處にて、また二の條をつけ、上を八分、裾の方を一寸二分ばかりの幅になして襞積をとり、次に襠の眞中の折目を、前の相引より三寸ばかりはなしたる處まで引き入れて、第二のひだを折り、引きまはして、右の方を手元によせ、相引よりまた五寸の處にて折り、二のひだも、左と同じく折り、またるの二のひたより五寸の處に折りをつけ、左の三

のひだの下にさし入るべし。之をふくろ襞積と云ふ。さすれど、左三つ、右二つ外面よりは見ゆるなり。さて、そのひだは、上の方はみな八分づゝ、下の方はみな一寸二分づゝ、よくそろへて、かり糸にて、上下ともにとめおき、後に緘して、左の手の方へ上をむけ、右の手の方に裾をおき、相引より九寸に折りて、襠の眞中に手を入れて折りをつけ、次に、右の方を、相引より七寸五分に折りて、左の方の七寸五分の處にて引き合すべし。之にて、ひだはとれたるなれど、よくくるはぬやう、しつけにて、ひだを閉ぢおくべし、但し、裾の方は、前後ともに閉ぢつけてもよけれど、上の方は、前、後、ともにはなして閉ぢおくべし。ひだをとり終らば、あまりに長くなれど、次回までつゞく、あだすぢのつかぬやう、しはにならぬやう、正しく、ていねいにたゝみおくべし。やがて、次回にて、仕立上ぐるれど。

造花

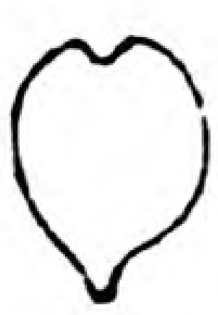
共立女子職業學校教授
伏見藤三郎

松葉牡丹

岩蓮華の類の草にて高さ三四寸ばかり、枝繁くしてはひりひろがれり、葉の莖にならびつきたるさま少しく松に似たり、夏の末あつき日ざかりに美はしき花むらがり咲く。

滿開花。　花瓣は、絖に裏より薄糊を引きて用ゆ、はじめ第九十五圖の形に之を斷ち后色染すべし、色は白、赤、黄、斑等あり。

第九十五圖



赤のものは、花瓣の元を小しく「オウヲミ」にて

黄色にばかし、ほかは「フロクシン」と「スカレット」等分に合せて染むべし、其他各色に應じて適宜に染め、生乾のとき布を疊みたる上に載せ、裏より中の瓣鏝にて花瓣の左右を少しく凹まし、又表より中央を凹ますべし、斯くして后、花瓣の元に細き針金を着け、五枚を纏めて一の花となす。蘂は、すが糸一把を採りて長さ二三分許の處に細き針金を堅く卷きつけ、其の餘りはきり取るべし。色は花瓣赤なれば赤、靑なれば靑、白は元を少しく靑くし、蘂の先にある花粉は、米の粉を「オウラミ」にて染めて着けるなり。

蕾　は、薔薇の蕾と同じ事に紙に少しく綿を包み、元をくゝりて造る。

葉　は細き針金の先を二つに折りて綿を挾み、中央を少し太くなる樣に、長さ四五分となし、細長くして少しく平たく、稍そりたる形となし、其の上に、糊に「オウラミ」七分「グリン」三分を合せたるものを指にて能く摺り附け、乾きたれば又附け、凡そ三四回もかりくりかへして光澤を出すべし、斯の如く造りたるものを、花の元に五本許り付けて萼の代りとなし、夫より少し間を設きて、三本を接近して着け、又少し離れて、三本を近くつけ漸次に斯の如くして莖にくゝり、后葉のつき根の處に各少しづゝ綿を卷きつくべし。(第九十六圖參照)莖に卷く紙は、花の赤きものは薄赤紙、白、黄、紋などは、薄靑紙を用ゆべし。

第九十六圖



だいどころ

素麺「スープ」

先づ、素麺を五六寸に切り、之れを熱湯に投じ、煠でたる後、肉の煎汁を能程に投れ、牛酪と、食塩少量を加へて凡六七分間煮たる時、能程の醤油を注して鹽梅し、其沸騰つを待ちて皿に盛り、胡椒少しを振掛て食すべし。

魚羹

新鮮らしき小魚を能く洗ひ、常の如く拵へ、頭、尾、鰭とを切り捨て、之れを蒸して軟かくなし、之れに、犢、又は鶏兒の煮汁五六合と、細かにきざみたる一個の玉葱、二本の蕪菁と、蘭蒿少しを加へ、水壹合を注して、煮ること凡二三十分間の後、水嚢にて漉し、骨を去り、肉のみを鍋に戻し、能程の牛酪、胡椒、食塩等にて鹽梅し、更に鶏卵四個と、大匙一杯の米利堅粉を投れ、十分間程文火にて煮たる後盃に盛り、香氣ある青味を添て用ふべし。

又前の如く小魚を洗ひ、鱗を去り、腸を取り、脊より庖丁を入れ骨を去り、細かくきざみたる洋芹、胡椒、食塩等を凡五勺の米利堅粉に混せ合せ、魚の腹に詰め、其上を糸にてしむり、文火にて十分間程湯煮し、其煮ゐたる時肉を崩さぬ様掬ひあげ、犢、又は鶏兒の煎汁の中に投れ、再び煮ること十分間にして皿に盛り、青味を添て用ふべし。但皿に盛る際魚をくずさぬやう注意すべし。

學園



秀歌集（五）

鹽井福子

石川少郎歌一首

しかのあまはめがりしほやきいとまなみ
　くしげのをぐしとりも見なくに

○しかの海士は、しかは筑前の國糟屋郡に資珂島と云ふあり、其處の事なり。あまは漁人の事なり○めがりしほやき、めはわかめ、あらめ、ひるめなど、すべて海草の事なり、がりは「とる」事なり、鹽やき、鹽をやきてとる事なり○いとまなみ、なみは「なさに」と云ふ事にて、「ひまもなさに」との意なり○くしげの小櫛、くしげは「くしぞこ」の事なれど、此處にはくしけづると云ふ意もこもりてあらん。またある説には、くしげにはあらで、ゆするならんとあり、ゆするは髪を洗ふ、または洗ふ水などを云へど、くしぞこの方しかるべしと思はる。をぐしは小さき櫛と云へど、たゞくしと云ふも同じにて、別に小に意味あるにあらず○とりも見なくに、なくはぬののびしなり。

○一首の意は、志かのあまの少女たちは、海草をとつたり、鹽をやいたりするのでいそがしく、髪などはかき上ぐるひまもなさに、くしぞこのくしをとり出しても見ぬほどにいそがしいとて、海士のいそしきさまを思ひやりし歌なり。

高市連黒人歌二首の中

いざこどもやまとへ早くしら菅の

眞野のはりはら手折りてゆかん

○之は羇旅の歌なり○いざこども、いざはさあ、さらばなど云ふ呼びかけの言葉なり、子供は旅路に從へつれし人々を云ひしなり○白菅の、地名なるべし○眞野のはりはら眞野は攝津の國八田郡にある地名なり、榛は當時染料になしたる草なり。はり原とは、その草のはへたる原なり○手折りてゆかん手折りては、たゞ折りてと同じにて、「をりて行からう」と云ひしなり、

○一首の意は、さあ、こどもたちよ、皆たちよ、此しらすげの眞野の榛原のはりの木ををりて、倭へ早く行からうと云ひしにて、「古にありけん人のもとめつる衣にすりけん眞野のはり原」などある古歌を思ひよせ「古へを思ひ、かつ、己れ都へ早くつかまほしく思ひて、かくよみて旅路を急ぎしあはれの歌なり。

幸二志賀一時石上卿作歌

此處にして家やも何處白雲の
たなびく山をこえてきにけり

○之は持統天皇、三河國、美濃國に幸し玉ひし折り、志賀にも幸し玉ひ、其折り、左大臣石上麻呂公、近江の國より、大和まで、山々重なれるを見て、よみ玉ひしなりとぞ○此處にして、「此處にありて」の意にて、下に見る意に加へて見べし○家やも何處、家やものやは呼び出しの言葉に疑もかゝりをるなり、もはまあとの意なり、何處の下にはならんの意を加へて見るべし。「家やまあ何處らであらう」との意なり。此の卿の家は、奈良郡にありしなり。

○一首の意は、此處にありて見て見るに、我が家

や、まあ、何處あたりであらう、さつぱり分からない、こんなに、白雲のたなびく山を幾重も越ゑてきたのであるわいと云ひしにて、此のけりは歎息の意なり。旅にして、已れが家を思ひ、白雲の重なる山に深くわけ入りしおぼつかなき心を、よみ出しあはれの歌なり。

漫録



雨月物語

故人　上田秋成

貧福論（つゞき）

翁いふ、君が問玉ふは往古より論じ盡さゞることわりなり。かの佛の御法を聞けば、富と貧しきは前生の修否によるとや、此はあらましなる敎へぞかし、前世にありし時おのれをよく修め、慈悲の心専に、他人にもなさけ深く接はりし人の、その善報によりて、今此生に富貴の家にうまれきたり、おのがたからをたのみて他人にいきはひをふるひ、あらぬ狂言をいひのゝしり、あさましき夷こゝろを　見するは、前生の善心かくまでなりくだる事はいかなるむくいのなせるにや、佛菩薩は名聞利要を嫌給ふとこそ聞つる物を、など貧福の事に係づらひ給ふべき、さるを富貴は前生のおこなひの善りし所、貧賤は惡かりしむくいとのみ說なすは、尼媽を蕩かすなる佛法ぞかし。貧福をいはず、ひたすら善を積ん人は、その身に來らずとも、子孫はかならず幸福を得べし。宗廟これを饗て子孫これを保つとは、此ことわりの細妙

なり。それ善をなして、それその報いの來るを待は直きこゝろにもあらずかし。又惡業慳貪の人の富昌ふるのみかは、壽めでたくその終をよくするは、我に異なることわりあり。霎時聞せたまへ、我今假に化をあらはして語るといへども、神にあらず、もと非情の物なれど、人と異なる意あり。いにしへに富る人は、天の時に合ひ、地の利をあきらめて、産を治めて富貴となる、これ天の隨なる計策なれど、たからのこゝにあつまるも天のまに／＼なることわりなり。又卑吝貪酷の人は、金銀をみては父母のごとくしたしみ、食ふべきをも喫はず、穿べきをも着ず、得かたきいのちさへ惜とおもはで、起ておもひ臥てわすれねど、こゝにあつまる事まのあたりなることわりなり、我もと神にあらず、佛にあらず、只これ非情なり。非情のものとして人の善惡を糺し、それにしたがふべきいはれなし、善を撫惡を罪するは、天なり、神なり、佛なり、三つのものは道なり。我ともがらのおよぶべきにあらず、只かれらがつかへ傅く事のうや／＼しきにあつまるとしるべし、これ金に靈あれども、人とこゝろの異なる所なり。また富て善根を種るにもゆゑなきに惠みはほどこし、その人の不義をも察らめず借あたへたらん人は、善根なりとも財はつひに散すべし、これらは金の用を知て、金の德を知らず、かろくあつかふが故なり。又身のおこなひもよろしく、人にも志誠ありながら、世に窮られてくるしむ人は、天蒼氏の賜すくなくうまれ出たるなれど、精神を勞しても、いのちのうちに富貴を得る事なし、されどこそいにしへの賢き人は、もとめで益あれどもとめ、益なくとももとめず、己が好むまに／＼世を山林にのがれて、しづかに一生を終

る、心のうちいかばかり清しからんとはうらやみぬるぞ、かくいへど富貴のみちは術にして、巧なるものはよく湊め、不肖のものは瓦の解るより易し、且我ともがらは、人の生産につきめぐりて、たのみとする主もさだまらず、こゝにあつまるかとすれば、その主のおこなひによりてたちまちにかしこに走る、水のひくき方にかたぶくがごとし、夜に晝にゆきゝと休ときなし、たゞ閑人の生産もなくてあらば、泰山もやがて喫つくすべし、江海もつひに飲はすべし、いくたびもいふ、不德の人のたからを積は、これとあらそふことわり、君子は論する事なかれ、ときを得たらん人の儉約を守りつひえを省きてよく務めんには、おのつから家富人服すべし。我は佛家の前業もしらす、儒門の天命にも拘はらず、異なる境にあそぶなりといふ。左内いよく興に乗じて、靈の議論きはめて妙なり、舊しき疑念も今夜に消じつくしぬ。試にふたゝび問ん、今豊臣の威風四海を靡し、五畿七道漸しづかなるに似たれども、亡國の義士彼此に潜み竄れ、或は大國の主に身を托て世の變をうかゞひ、かねて志を遂んと策る、民も亦戰國の民なれば、耒を釋て矛に易、農事をこととせず、士たるもの枕を高くして眠るべからず、今の躰にては長く不朽の政にもあらじ、誰か一統して民をやすきに居しめんや、又誰にか合し給はんや。翁云、これ又人道なれば我しるべき所にあらず、只富貴をもて論せば、信玄がごとく、智謀は百が百的らずといふ事なくて、一生の威を三國に震ふのみ、しかも名將の聞えは世擧りて賞する所なり、その末期の言に、當時信長は果報いみじき大將なり、我平生に他を侮りて征伐を怠り此疾にかゝる、我子孫も即て他に亡さ

れんといひしとなり。謙信は勇將なり。信玄死ては天が下に對なし。不幸にして遽死りぬ、信長の器量人にすぐれたれども、信玄の智に及ず、謙信の勇に劣れり、しかれども富貴を得て天が下の事一回は此人に依す、任ずるものを辱しめて、命を殞すにて見れば、文武を兼しといふにもあらず、秀吉の志大なるも、はじめより天地に滿るにもあらず、柴田と丹羽が富貴をうらやみて、羽柴と云氏を設しにてしるべし、今龍と化して大虚に昇り池中をわすれたるにあらずや、秀吉龍と化したれども蛟蜃の類也、蛟蜃の龍と化したるは、壽わづかに三歳を過ずと、これもはた後なからんか、それ驕りをもて治たる世は、往古より久しきを見ず、人の守るべきは儉約なれども、過るものは卑吝に陷る、されど儉約と卑吝の境よくわきまへて務むべき物にこそ、今豐臣の政久しからずとも、萬民和はしく、戸々に千秋樂を唱はん事ちかきにあり、君が望にまかすべしとて八字の句を諷ふ、そのことばにいはく

堯蓂日杲　百姓歸家

數言興盡て遠寺の鐘五更を告る、夜既に明ぬ、別れを給ふべし、こよひの長談まことに君が眠りをさまたぐと、起てゆくやうなりしが、かき消て見ねずなりにけり。左内つらつら夜もすがらの事をおもひて、かの句を案ずるに、百性家に歸すの句粗其意を得て、ふかくこゝに信を發す、まことに瑞草の瑞あるかな。

（大尾）

奢るものは富みても足らず
儉なるものは貧しくして餘あり
懶惰は貧門の鍵

かたみの蕨（續）

志貴婦遺稿

我未見好仁者

花紅葉をりかさしてはめつれとも
　まことのいろをしる人やたれ

有能一日用其力於仁矣乎

人なつる道にちからやたらさらん
　その人とては世にはあらしな

人之過也各於其黨

あやまちはよきもあしきも人々の
　とる處よりひきてこそしれ

朝聞道夕死可矣

夕にはよしや死すともこのねぬる
　あしたにきゝし道はたかへし

士志於道而恥惡衣惡食者未足與議

身のほとを思はすくちにみに着る
　人をはともとましはるなゆめ

君子之於天下也

うまひとは法と道とにしたかへは
　そねみ恨は世になかりけり

放於利而行多怨

己か身に欲することのなかりせは
　ねたく恨はむすはさらまし

能以禮讓爲國乎何有

何事ものりをまもりてまこともて
　つき〳〵ゆつれ國をもるひと

不患無位患所以立

よしゑやし位なしとていかゝせん
　天のゆるしのいさを無き身は

參乎吾道一以貫之

久かたの天のよさつらなりなるも
もとゆふかはのまことひと筋

子出門人問何謂也
師のみちはつねに情といつくしみ
ふたつのみにて外なかりけり

君子喩於義小人喩於利
かしましやわしきにさわくむら雀
そらゆくれつの聲を聞くにも

見賢思齊
賢きを見ては我か身のつたなさを
反りみてこそしるへかりけれ

事父母幾諫
父母のみちにたかへることあらは
忍ひしたひてなほもいさめよ

父母在不遠遊
たらちねのなくての後は我なから
ゆるす遠路のはなのたひかな

三年無改於父之道可謂孝
ます時のそのまなしりを思ひつゝ
つとめやせまし三年ふるまて

父母年不可不知
つかへてはかつ悦ひつしたひつゝ
老ゆくすかた見るそかなしき

古者言之不出恥躬之不逮也
れはかたのよきもわしきも古人
いはぬそまことと身を反り見て

以約失之者鮮矣
とにかくにつゝまやかにと心得て
事もこゝろもとりなはなちそ

君子欲訥於言而敏行

いふことは羊のあゆみれそくとも
　なすは小鳥のたちゐすること

德不孤必有鄰
うま人のうまきこゝろを慕ひきて
　やかて群をもなす世なりけり

事君數斯辱矣
君をしも諌ひとならはまこゝろの
　れもひつらぬく時をまつへし

（をはり）

故高畑式部刀自のそがをしへの
子たちに論語章句のこゝろを詠
み置きたまひし一卷を見侍りて

敎子（税所氏）

ことの葉の露のみならていにしへの
　ひしりの道もわけし君かな

一條西行

落合三埭

一條西行とは梅月堂宣阿をいふ。宣阿が望岳の詠、畏くも雲上の御感に入り、遂に此稱あるに至りしなり。今富士一覽記の一節を抄して當時を追想するに便とす。

二十三日（此記の始に賀茂の祭も稍近付頃はひとあれど、四月なるべし。）よべよりふりたる雨曉近くなりゆくまゝ、月の光障子の紙よりすきたる、いと嬉しくて、朝はらけのはれたる程に、富士の高根望みてん、日たけなぞまた曇りもぞするとて、まだ夜をこめて鹽見坂に上りて見るに、空快くはれて、艮の方に物にも似ず半天にさし出たり。天台の四萬八千丈も、麓の雲に埋もれ、須彌の山も肩をや比すらん。諸峯羅列似二見孫一とも是をぞいふべき。す

べて此山の美景、前賢舊哲の錦心繡口に陳られたれど、かたくなゝる言いひ出ど、玉に交れるさゞれ、花のほとりの深山木ならんと思ひながら、志のゆく所をとなへて、せんげんの神明に手向るならし。

山々はまた明ぬよの雲の上に
白きを見れば雪のふじのね

（有詩畧之）

此旅も此山見んの催しなれど、麓までと思ひまうけしに、伴ひける中に、障る事いできたりけれど、せん方なくて、樂をば極むべからずといひやり、名殘つきずながら、これより歸りぬ。こゝにも見ゆ、彼所にもなどいふほどに、二川のわたりまでも、人を追來るやうに、山の面猶明らかに見ゆ、吉田の西の野までも、いたゞきは見ゆめり。

此旅の同伴は、秋野道塲の嚴阿法師井上隨入禪門なりきといふ。この事も此記の始に見えたり。

橘舍漫錄（つゞき）

橘の家主人

兄弟の夫妻

皇國の上古は、同母兄弟にあふ事はなくて、異母兄弟はいまず、今の世より見れど、ことはらといへどもはらからといたくかはらぬを、夫妻ともなれるは、世々の物しりの打かたぶくめる禽獸にちかきに似たり、されど、古書どもを考へて人情によそへて思へど、自らゆゑあることとなり。古は尊き卑きとなく、夫妻のまじらひは、女の家へ男の通ひしことにて、今の如く夫の家へむかへとりしものにはあらず、かくて其子はおの〱其母のもとにて生長ものゆゑ、異腹は兄弟といへどいと疎く、他姓の人と異な

る事なし、女どちのことはらは、いける限相見ざるもあるべし、よき女を見て、いかで得てしかなと思ふは人の性なるに、かうと〱しくやる中なれど、まぎもし、なびきもし、しか人情のよる處なる故、神もゆるし給ひ、人もとがめざりしなり、こはもとより道なり、さらに禽獸に近きことにはあらず。しかるを同姓不二相娶一といふ事を準として、あしかる事にいひれもふ人もあめるは、いとをこなることなり。同姓相娶らぬは周の世の法なれど、これ周公の制にそむけりといはゞ、我のがるゝ所なし。もし道にそむけりといはゞ、率レ姓謂二之道一いかでか道にそむくべき、皇國は、自ら皇國なり、周の制度を守るべきゆゑよしあらましや、さて古異母兄弟に婚せしは道に背けることはなけれど、今世のありかたちはことはらといふも、同所に生出て、たゞはらからも同じ定にれなたつものなれど、これにかふはまことに禽獸にちかし、みだりがはしきことにて、公ざまにも、其御禁あることなるべし、古と今と事のさまたがひたれど、是非する所もことなり、學者は何事につけてもこの沿革に心を用ゆべきわざなり。

主人いはく、皇國の歴史を見るには、自ら皇國の精神あるべし。上古の風俗をさとらず、たゞ後世のさかしら心もて、上古の事を論はむとするは、あたらぬことなり。外敎など奉ずる人の中には、皇國の事としいへど、惡ざまにいひけちて、外國をのみめではやすめり、而かもわが顔に唾するをひとしきを志らぬは、なか〱に憐れむべき限とやいひつべからむ。

膚を見はすこと

中頃は、赤肌の見ゆるを殊のほかに耻ぢしことなり、

女は兄弟夫などにも、をさ〱さしむかひては見えず、几帳へだてゝ物語などせしことなり、禁中など、又里にても、やむ事を得ざる所を出入するに、筵道などしきてけさうなる所をわたるには、よろしき人は几帳さゝせ、さらぬは顔に扇しあてゝ面かくしすることなり、ひたひ髪といふは、今びむといふあたり髪を、顔のかたへまゆじりのほどまでときかけて、末を肩へゆりこしたるものなり、かくするは、皃なかばは髪のうらにかくれて、片そばよりは見えざるやうにとの心しらひにこそ、その末をそぎてみじかくして、ともすれば顔へはら〱とこぼれかゝるやうにしたるは、扇などもなくてわりなき時、ふりかけて面隠しせむ料にやあらむ。大和物語に、同帝、月のおもしろき夜、みそかに御息所たちのみぞうしをもみありかせ給ひけり、御ともに公忠さぶらひけり、それにある御曹子より、こきうちぎ一かさね着たる女のいときよげなる出來て、いみじうなきけり、公忠を近く召して、見せ給ひけれど、髪をふり蔽ひて、いみじう泣く、云々。枕草紙に、清少納言が中宮にはじめて參りたるほど伊周公にとらへられて耻かしかりしことを書ける所に、かしこきかげとさゝげたる扇をさへとり給へるに、ふりかくべき髪のあやしさゝへ思ふに云々とあり。下衆なども衣かつぎといふをして、あらはに人の顔見るまじき用意せしことなり、下りたる世のものなれど、七十一番の職人歌合に、立君のかつぎ着たる圖あり。これにても大かた世中のさま知られたり。正明はじめて京に物したりしは寛政のはじめなりき、其時は被衣着たる女を時々見つるに、四年ばかりさきにゆき（享和比）し時は、さやうの人には一人もあはず、又尾張國な

どにても、六七十年の古は、人みな着たりしものといひ傳へて、古き家には今もなほもたり、人のみまかりし時とかう物する寺、あるは三昧などいふ所にて、したしき限は男女みな送する事なるに、女はしろきかつぎを今もきるなり、名も打まかせてかつぎといへど此白かつぎのことにて、凶服の名のやうになりにたり。

主人いはく、わが生れし伊豫國などにては、下か下に至るまで、近き比までは眞綿もてつくれる綿帽子といふを打被りつるやうなり。婚禮の時には横にし、葬送の時に縦にするなり。これ等昔の被衣などの名殘にやあらむ、さてもこの作者のいひし如く、田舎めきたりとて、頭だちたる人より廢止するやうになりぬ。あゝ進みゆく世か退きゆく世か、今にはなべて會堂にものし天帝に誓ひて式をあぐるやうにはならじか、國あれば自ら國の禮あるものを。

又白かつぎにむかへて、むかしきたりしたゝのかつぎを染かつぎと稱ふる、主客たがひたれど、なほ餘波あり、名古屋にては、田舎めきたりとて、此白かつぎも着ぬ事となれるは、くちをしきことなり、しかるにこの江戸などの女どもは、殊更に領をひろくあけて、肩までも見ゆるやうにす、又袴きぬはなべての事なれど、こゝにはきぬどもを一つまへといふに着て、すそを蹴出すほどに、あゆむたび〳〵脛白く見ゆる、いとしとげなし。昔も男は顔はかくされど、顔をれきては指のさきをもをさ〳〵あらはさず、朝野群載にのせたる進退傳に、取レ笏之後、不レ顯二兩手一、左手之上、覆二其袖之端一、側レ手隔レ袖取レ笏と見ゆ、又辨官抄に、欲レ揖之間、以二左右手一把レ笏、

手不レ顧、また持レ笏事、右手把レ之、不レ令レ動ニ搢笏一、以ニ左手一引ニ右袖鰭一天、人差指與ニ中指ノ中仁引夾天拳テ藏爪、人差指許令レ出也と見ゆ。この類なほ多かれど、思出るまゝに一ッ二ッ引つ、およそ袍の下に襲きるも、表袴の下に大口きるも、指貫の下に下袴きるも、又縫腋の下に半臂きるも、皆ほころひて膚あらはさむことをおそれての用意なり。

主人いはく、此あたり今の西洋のさまに似通ひたりとおぼゆ、あつしと男も肌ぬぎになりたるは見苦し、況して女をや、あるが中にわかき人は殊更に目にたちて見劣りせらるゝなり、いかに髮はくろくして、白き玉の膚ははえわたれるが如くなればとて。

しかるに今の江戸ざまの諸家の召供は侍とあるものよりして、下衆男に至るまで、みな脛高くかゝげて、赤肌をあらはすを禮節とすること也、亂世などにはかやうにせしがつきづきしく見えしを、今もなほ其ならひのまゝに物するなるべし、下すのかぎり、グハエン鳶の者などいふに至りては、常裸にて、かひな肩のあたりにくさぐさの繪を彫いれて、墨くろぐろと見ゆるに、靑く赤く色どりなどして、父母の遺體をきざみて風流する、あさましき事なり、こは文身といひてから國人もいやしむる事ぞかし、又そのかみは衣大口など打とけてをる事はあなれど、烏帽子ひきいれずして人などに見ゆることはさらさらなき事にて、時忠の大納言の月代のすきかけ、簾中より見えしとて、荒涼なる事に玉海にはしるされき給ひしを、今はなべて烏帽子きるものはなく、月代もひかるばかりそりたるが禮にて、さらぬをりは、此比いたはる事侍りてなむ、長髮にて無禮にな

ど、かしこまりいふよ、時世をふるまゝにかはりもてゆくさま、かうまでやはと驚かるゝ斗なり。

主人いはく、時世はいかにかはれども、よきことはよく、あしきことはあしきなり。よしあしを撰ぶは、文明の世の最も尊ぶべきことなり、古今を通じて鑑みすてやは、さるにてもこの作者のいひしことは、今明治の世にもさながらいひ得らるゝよ、時世をふるまゝにかはりもてゆくさまからうまでやは。

（未完）

雷

金津常十郎

夏のひながの徒然なるあまり、そこのわざなれど、徒ら事をものし見むやと思ひたちて、例の拙き筆のすさびればつかなく、雷のがら〳〵と書きちらして、聊か孃たちの清き耳をとゞろせんとするは、これ、やがて、雷の話なり。恐らくは、孃たちの耳を轟かせで、かへりて、己の拙き名を轟かさんも、名に因みて是非もなしや。

雷は、空中に在る陰電氣と陽電氣との和合するによりて發する響にして、その際に光の發するものを電閃といふことは能く人の知れる處なり。落雷といふも亦空中の電氣と地中の電氣とが和合するの現象にて、こは、なか〳〵に奇險のことなり。今にては、雷避けなどいふものもあれど、昔はさるものもなけれど、何處にても、處を撰ばず、家の中、人の立ちたるなどにつたはりて、家を燒き人を殺しなどすることもあり。

己、かつてこの落雷を見たることあり、折しも夏の最中にて三伏の炎熱てりはたゝきて、身を寄するに

處なく、夕立もがなとつぶやきいるうちに、空俄にかきくもりて黒雲滿天を蔽ひ、雨忽ち盆を覆すが如し、やがて稻妻閃きて、雷鳴の音烈しく鳴りわたり家の障子にひゞきて今にも裂けなんばかりなり、かくてしばしは已まざりしが、家のわらはべは打ちさやぎて、それ臍を隱せ、線香をたてよ、蚊帳を吊れなどいひのゝしりて、泣きも出ださんけしきなるもをかし、やがて雨も漸く小やみて、稍もの靜かになりにたるに、家のま近の西の方の大樹のもとに、雷落ちたりとて人々のゝしりさわぐ、いきて見るに、硫黄の如き臭ありて、大きなる樹はたゞなかよりくじけて折れ裂けたり、如何にすさまじきことよと覺えず身をのゝきぬ。

さて、雷をいかづちといふことにつきて言義二つあり。

一は「いかりもち」といふにて、「りも」を省き、「つ」は助辭なりといふにあり。故玉田永敎といへる人のものせる臼挽歌の中「地震雷鳴大風吹くは天の怒を恐れみよ」とあり。

本居宣長翁のものせる玉鉾百首の歌に「あやしけぞいかづちこだまきつねとら龍のたぐひも神のかたはし」と詠めり。註釋に、雷はもとより、鳴神とて神なり、とあり。

そのかみは、あやしきものを皆神といひしなれど、雷の如きも怪神にいひなしたるなり。

一は、「いかめしき神」とて、いかめしく鳴りとよひたかりなれど、かくいふなるべし。わが高祖父宮井安泰がものせる瑣細之記といへるふみに、「ち」は神の古語なりとあり。いとおもしろし。

又瑣細の記に。

今雷を繪に寫して、角あり、牙あり、忿怒のオニ（鬼）連鼓を打つの恣なり。連鼓は雷鳴を表はすものなり、角、牙、忿怒は陰陽交激の象なり。艮の鬼門、牛虎合形なり。神家雷神を號けて高津神といへり。

とあり。

古事記の伊弉諾尊、伊弉冊尊を慕ひゆき給ふ條に、

刺ニ左之御美豆良一。（これは上代の男の裝にて髮を右左へ分けて角の如く結びつかれたるものなり）湯津津間櫛之男柱一箇取闕而。獨ニ一火入見之時。宇士多加禮蛆虫たかゝ斗呂呂岐弖。（腐れて流るゝ樣になり居たるをいふ）於レ頭者大雷居。於レ胸者火雷居。於レ腹者黑雷居。於レ陰者折雷居。於ニ左手一者若雷居。於ニ右手一者土雷居。於ニ左足一者鳴雷居。於ニ右足一者伏雷居。幷八雷神成居（八種の名目は形容を示せるならん）

とあり。

玉木正英といへる人のものせる、玉籤集といへる書の八色雷公之傳といへる條に、

八色雷公は、八は伊弉冊尊御全體の數、雷は人之心を驚すものなり。伊弉冊尊御全躰の脹大滿高を見給ひて驚き玉ふ。故則雷公と云ふなりとあり。

又伊弉諾尊、伊弉冊尊之傳といへる條に、

伊弉諾尊、伊弉冊尊、在レ天者、造化陰陽之神、此を未生の二尊といひ、在地者、氣化人體之神、此を已生の二尊と云ふ。故兼ニ造化氣化一之神也とあり。

何次々に、緣あるも緣なきも、雷の名あるものをいさゝかかきつけん。

（未完）

才くらべ（五）

蓬生屋女史

十返舍一九の奇才

世に有名なる膝栗毛の小說をつくりたる滑稽家一九と云ふは、げにその彌次喜太の如きをかしき洒落なる人なりき。此の人、姓は重田、名は貞一、別號を十返舍と呼びて、東都通油町に住みけるが、手跡いと淸らに、畫かく事、また、妙にして、狂歌、誹諧なども、また、おもしろく、をかしき事書き流したる著述書、すべて二百三十餘部にも及びたるが、ことく〳〵にみなをかしく、見る人腹皮をよらぬはなかりしといふ。此の人、酒を好み、遊びを好み、登樓を好み、あるほどの錢は、みな、酒にかへて、己れはもとより、人にもふるまひ、日每に廓に遊びくらし、登らざる樓はなく、なじまざる娼もなきほどなりしとぞ。かゝる高名の人になじみあるときは、客人を招く妨げとなるものなれどとて、一同協議し、一九が大門を入る事をとゞめけるが、當時これも高名の蔦のから丸と云ふ人、一九がために、そへ判して、大門より內へ入らざると云ふ證文かきて、つかはしけり。その後、三年ばかりありて、人をたのみて、これをわびて、證文をとりもどし得たるが、この證文世にめづらしきものなれどとて、ある貴人、之を請ひうけて、へうさうして、床の間にかけられ、客人のある每に、その事語り出でゝ、笑はせけるとぞ。高名の人はあしき身持までめでたがられけるものかな。

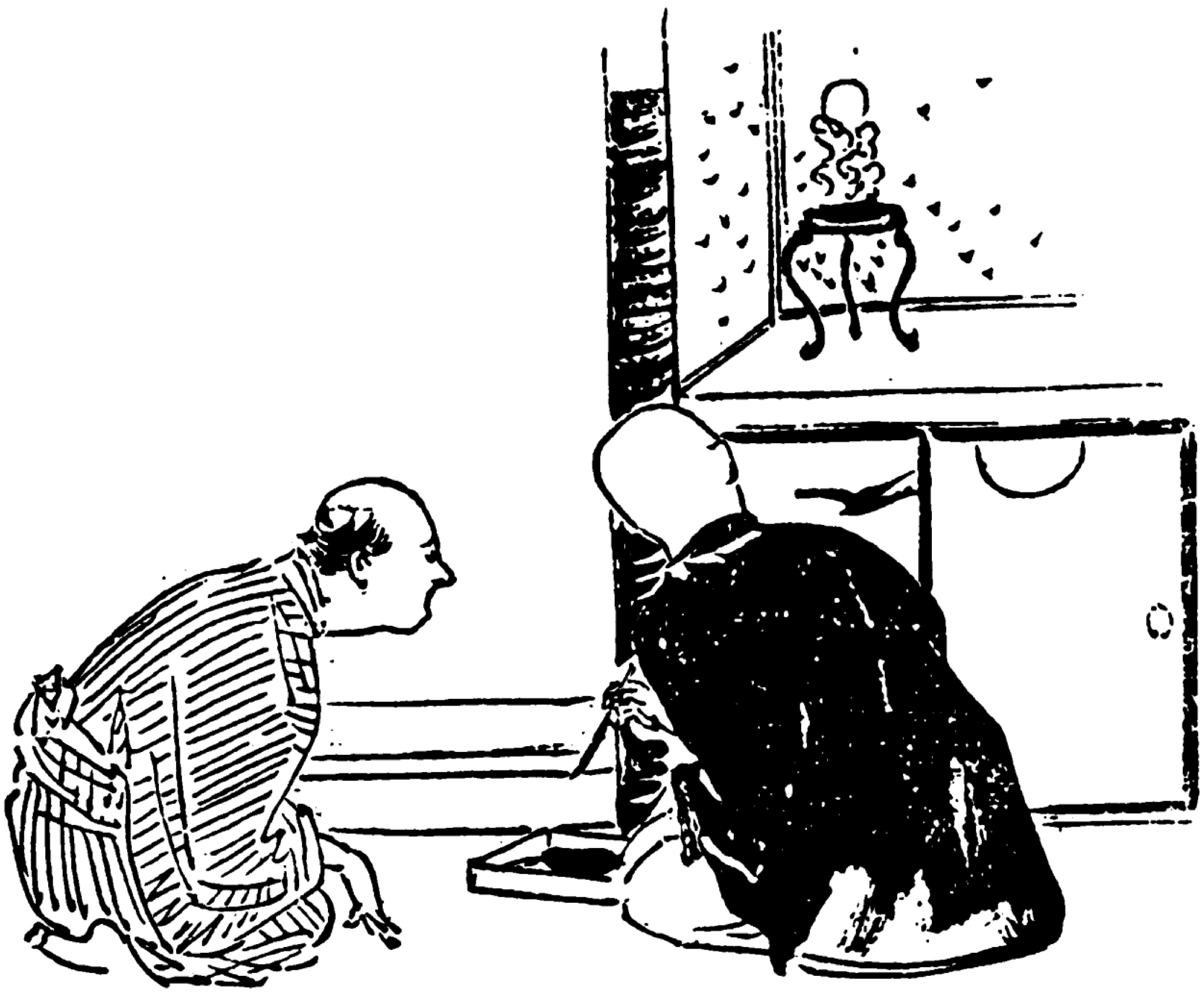
此の人、いやしからぬ人の子なりけるが、金錢は佐渡の土、何ものにかわらんとて、湯水の如くつかひ捨てけれど、やう〳〵に、家まづしくなりきて、は

ては朝夕のけぶりもたゝぬほどなるを、一九、更に心にかけず、なほ得るほどの金錢は云ふも更に、もてる調度も、ある限り賣りて、酒にかへ、飲みては醉ひ、醉ひは歌ひ、歌ひては舞ひ、徒らにのみ日をくらしければ、家はいよ／＼貧しくなりて、壁はれち、からかみさへに破れはてたるを、白き紙もてはり、簞笥、床の間、ちがひ棚はさらなり、花いけ、かけもの、みな、見ぐるしきもの丶みとなりけるを、筆にまかせて畫がき散らし、はては、塗籠の入り口などにも、かきたてけるに、遠くより望み見るときは、さながらいみじき調度を並べたて、富める人の家の如く、近くよれど、誠の物はなくて、みな、畫がきたるなれど、人々おどろきあきれぬ者なかりしと云ふ。

七月の魂まつりにも、かざる魂棚もなく、供ふべきものもなきに、やがて筆とりて、壁に棚を畫がき、朝には素麵供へんとて、其素麵をもりたる畫をかき、夕にはもちひ供へんとて、これまた畫がきけるとは、さても、をかしき限り、亡魂も如何ばかりか、腹をよられけることなりけむ。

年のくれなども、かちんもねつかねど、かざるべきお供もなきに、やがて、また、筆して、大いなる臺に、三尺あまりの鏡餅のせたる形をかきて、壁にはりつけおきけるとなり。かゝるありさまなれど、大づもごりなどには、拂ふべき錢なきまゝに家に居るもうるさしとて、夕方より家を出でゝ、其處此處さまよひありきて、掛乞をはづしたりといふ。此の如くして、或時、柳原のほとりなる、日來むつみ語らふ友の許に行きけるに、友も家にありて、酒をのみてありけり。よき所に來合ひたりしよと、一九よろ

こびて、家に上りて、共にくみかはしゝが、はては、



酔ひて、例の如く、踊りさやぎけり。此の家に淸らなる板もて、おきの方に向へて、すぢかへてつゝたる年徳神の棚ありけるが、一九、背高き人にて、此の棚にて頭をいたくうちけるが、頭をかゝへながら

正月ははや神田まできたりけん
　筋違につるどしとくの棚

とよみて書きけるに、主人をかしがりて、隣の酒屋へゆき、こを見せて、物語りけるに、酒屋の主人も、いたくめでたがり、さやうなる先生ならば、御願ひ申度事あり、先生を我が方にわたこし給はるやうと云ひけるに、一九、酒屋ときゝてはいとうれしく、何事にかとて、早速行きけるに、酒屋の主人、床の間なるふくろ戸をゆびさして、このふすまは、かつて、名ある畫師にたのみてものしもらひたりしに、月にほとゝぎすを畫がゝれたり。此の鳥は蜀魂、死出のたをさ、めいどの鳥、または血をはく鳥など云ひて、

いといまくしき鳥なるが上に、月も陰のものにして目出度からず、あけくれ之を見るたびに、心安からず、心にかゝりぬるを、願くば先生目出たき歌をそへて、とりかへし玉はれとあるに、一九、やすき事なりとて、やがて、筆とりて、

　月は笠鳥の形はみのに似て
　　これやたからの山はとゝぎす

と、さら／＼書き流しけるに、主人いたくよろこび、御禮に何をか參らすべきと云ふに、酒をれきて、何をか請ふものあらんやと云ひけるに、さらばとて主人、酒肴多くとり出でゝ、さま／＼もてなじけるとか。なほ、をかしき談の數多なれど、次回にゆづりつ。

笑話

薫風仙史

昔しより道々につけて心をふかめたる人のしわざにはをかしきが多し。能因法師は「都をばかすみとゝもにたちしかど秋風ぞふく白河の關」といへる歌をよみて、その地をふまでは空歌なりと人にそしられじとて、さるところにこもり居て顔を日にさらして、旅してかへりたるさまにしてさて後この歌をば人に見せしとはみな人のしれることなり。これとはれもむきすこしちがへども、深く執心したるわざには世にことなるが多し。わがふるさとに某といへる翁あり。常に洒落にして戲れいふを樂とせり。鄕に養蠶する家ありけり。蠶もいよ／＼大くなりて桑を食ふこと夥しければ、家の子等身をわすれて立ち働く。さて桑をば遙なる處より馬に荷はせて運ぶなり。翁

途にてこの馬に遇ひしが、ふと心づきたるさまにて用ありげに、馬の後につきてその家に至れり。人々出でゝこの荷せたる桑をおろさんとて立ちさわぐに、翁は庭のこなたにたちて、いぶかしげなる面持して、問ふらくは、この馬に荷はせたるは何ぞといふに、人々答へて此は桑なり。翁も常に見て知り給へるにあらずやといへど、翁いよ／＼心得ぬかほにて、否此は桑には非ざるべし。みなよく心をつけて見るべしといふに、人々みなこの翁老いほうけて、かゝることをいふなるべしと思ひあなどりて、なほ「翁よくよく見給へこれ桑にあらではた何とせん。翁老いほうけて眼くらみたるなるべし」といふ。翁なほいよ／＼心とけぬさまにて、否とよよく見給へ、ぬし等は此を桑なりといへど、幾度數へても六把より外はなきにあらずや、とて舌をヒラと出して、物をいはで、立ち去りけり。人々はかられけりとて腹をかゝへて笑へりけり。郷のならはしにて、物六把をもて一駄とせり。されど桑を「九把」にかけて一駄なれど、六把なりといへるなり。呵々。

須摩の月（二）

白魚女史

しろがねよ、黄金よ、玉よ寶よといつきかしづかれても、なほ、わかぬものなるべき大領の娘も、慈母を失ひ、心なきもの〳〵手にかゝりては、たゞ石片や、木片の如く、やくなきものとのみ見られ、蟻の如く、蠅の如く、うるさきものとのみ、とりあつかはるゝあはれさは、實に松風村雨の姉妹の身の上なり。姉は今年やう／＼三五、もち月の光りまばゆきばかりなれど、妹も十三、もちに一夜を離るれど、うる

はしきかげは、姉にも劣らず、二人さし匂ふ光りは、流石高殿にもめづらしく、玉だれのかげめでたう、仰がぬものもなきほどなれど、作られし母あらんには、如何ばかりか、あかずやんごとなくうち守られんを、生みの母は、はやくも秋のよ嵐、果敢なき柞の落葉と枯れにたるは、はや七年のむかしにて、その後父が迎へたるは、もと貴からぬものゝ女とて、心もいやしく、情なき者なれど、流石に二年三年は、恐ろしき心の荊棘を、深く押しかくして、時國と共に姉妹を撫でいつくしみしかど、夫もよろこび、姉妹もうれしう、生みの母のかへりし心地して、やさしうはひまつはりけるを、いつしか、やう／＼あらはしそむる心のとげうらいたくあつかひ初むるやうになり、さては、二人がやさしうすがる袂を、唯うるさしとのみ、邪險に拂ひ捨てゝ見もかへらず。はては、見れど、一向にうるさげにて、言葉あら／＼しく叱りのゝしれど、すなほに、やさしき姉妹は、母の目に障らぬやうにと、離れがちに振舞へど、何と云ふまがりし心ぞ、くねりたる子よ、母はまゝしくもせぬものをとのゝしり怒るに、また、母よ／＼と側去らずまつはりかしづけど、貴人の子にあるまじきへつらひ心やとつぶやかれ、さては、はづかしう顔あからめて身を省みれど、ひが／＼しき心に母が云ふ事のはらだゝれてかと罵らる。難波入江のよしあしともに、束のまも叱られぬ時はなく、のゝしられぬ間はなきを、他處にきゝて、袂ぬらすものあれど、それさへ母には心よからず。はては、事をかまへて追ひ出せど、さらぬだに、主母の威權恐るゝ女子ばら、男ばら、姫との一言だにかしづくものもなく、たゞひつきの中よりつき從ふ媼の、かげにはなぐさ



め、ひなたにはかばふあるが二人の力草のみ。されど、それさへ、あけくれにはかしづかせず、身分はいかばかりなればとて、はや十歳をさへに越えしものに、乳母などのつきそひは無用なりとて、己が方へ招しつけて、用事ひまなくさしつくるに、乳母あまりにいとしとばかり、泣かぬ日はあらねど、それと事だつれど、唯むづかしくなるのみ、はては、いとまを玉はらんともなるべきに、さありては、我が身の外に守る人もなき姫御前の御身の上の、いと心もとなくなりまさるのみと思へど、何事も忍びて、斯くて陰ながらなりとも御守り申す程に、よき折りもあらば、殿に聞えて、姫が行末の落ち着きをはからはんと、つゝむけしきは、わるさとき母親の、早くも知れど、流石に罪なきに追ひもならず、蚊遣火のけぶき思ひにてぞ過ぐしける。

もとの母のなくなりしきはには、その人の臨終に、此子のいとしや、離れがたや、我が夫よ、必ず此子たちを、あだし人のしもとにあてたまはでよ、心のこりは是のみと、幾度か、くりかへしたる言葉のいみじう身にしみてか、もはや妻は重ねじとさへ云ひて、人のすゝむるをも、あながちにことわりて、二年がほどは、妻をも迎へざり時國なりしを、如何なる妻女があまき言の葉に心や取られけむ、今日此の頃は、二人をあはれと思ふけしきはなく、むかしは朝夕起臥毎に必ず先づかひ撫でたるものを、今は見んともせず。よるをだに遠ざくるほどになりけるに、姉妹はいとゞ悲しく、如何なれば我はかばかりの不孝の子とは生れしぞ、生みの父にまで疎まれはつるとはとて、夜毎に臥戸に入りて、二人は暫時はよゝと泣き、泣きていしつか寐入るが常なる哀れさ。さらで

も忘れ難き母親の、つく〴〵と忍ばれて、戀しさなつかしさいふばかりなく、せめて御墓にもと思ひて宿に立ち出れば、甥とやら、従弟とやら、母の血すぢの岩作と云ふ今年廿歳なる男の、笛吹くのみが能なるたわけ者の、常につきまとふが、いつしか後より追ひ來て、など乳母はつれ玉はぬ、婢女も伴れ玉はぬぞ、入らぬ愛想。さはかとて、乳母の迎にとて來たれど、何、さは、用をさしおきてなどとて、後目にさへかくる者が、何と思ひてか、入らぬ愛想の詞もまめやかに、ゐれよ、これよやとさしげなる振舞。姉妹は大かた其の心の底を知れたど、なか〳〵に恐ろしうもあり はづかしうもありて、うちとけたる應答へはもとより、遠く離れがちにのみ振舞へど、それを恨みに思ひては、二人が無き母の墓に泣きたる事をつぐるに、さらでも憎しと思ひ居る繼母の怒りはするぞく、はては、まゝしき母になるものにはあらざるよとて、泣きて、恨みて、それよりは、まゝしき母にな口きゝて、非道の母の顔な見ぞ、無き母御が石、此處にても來てすゑ給へ、如何ばかりか二人を守らせ給ふ事ならんなぞとて、三日も、四日も、五日も、物も云はずとは、あまりの呵責かな。

今宵は中の秋、十五日の月、松風が三五の祝ひ、少し雲かゝりたれど、中〳〵に、くまなきよりは身にしみてあはれなり。のう祝うて一曲、琵琶にてもかなでゝはといつになき、母のやさしき言の葉、今宵の月よりもめづらし。松風は、たゞうれしうよろこびかしこみて、琵琶ひきよすれば、妹も共に用意するを、岩作〳〵、汝が妹が祝日、早う來りて笛吹き合せよ、汝が吹きたてなば、月もさぞかりはすみのぼるらんと呼びたつる音に、二人ははつとばかりに

れどろきけり。



文林

出上螢　　近衞忠熈

ゆたかなる年のひかりを見する哉
田面にすたくよるのほたるは

梅雨晴　　久我建通

さみだれの涼しくはれし軒はより
雫とともにくりのはなちる

晴後遠望　　壬生基修

和田のはら八十島かけて晴にけり
いつち消にけん沖のあまくも

曉旅行　　津輕承昭

明ぬとて宿はたちしかはこねやま
しらみかねたる杉のしたみち

夏花　　交野時萬

鬼あさみさきたる野へに姫ゆりの
やさしき花もましりけるかな

竹風　　長谷信成

文机のうへまてつゆをふきいれて
まとのくれ竹かせはたるなり

森納涼　　諏訪忠元

水無月のあつさもよそに隔つらん
袂すゝしきころも手のもり

夏門　　梨川實顯

吹かせのいれとてあけし門なるを
ひとしとひ來は苦しからまし

船納涼　宮地厳夫
こき出て見れは夏ともれもはれす
船のうちにはあきやいりけん

夕郭公　阪正臣
桑つみしひとはかへりてゆふ月の
かけさす岡になくほとゝきす

避暑　加部厳夫
涼しさのときはの松のかけにきて
けふは夏をもはすれけるかな

庭橘　三輪義方
わが宿の庭のたちはなかをとめて
とひこし人もむかしなりけり

紫陽花　師岡正胤
世の人はいかに見るらん定まれる
はかにかはらぬゐちさゐの花

朝漁舟　三浦千春
よもすからなみまに見えし漁火や
けさこきかへる小舟なるらん

夏雲　大畑弘國
夏やまにきゐてゐとなきうき雲の
名殘やそてのあめとなるらん

月前水鶏　林甕臣
露むすふ池のはちす葉つきてりて
水鶏なくねもきく夜なりけり

麻生りき女　佐々豊水
世にたくひなき眞心のいしふみや
かたくかしこくたゝへさらめや

河邊霧　足立正枝
川の邊の松はかくれてあさきりの
なかをなかるゝ水のれとかな

杜鵑　渡邊光風

ほとゝきす高く名のれるひと聲を
ふたらの山の月にきゝけり

海邊蟬　菊池眞澄

なく蟬の聲もひとつにひゝきあひて
はままつ風のれとそすゝしき

内心如夜叉　伊東祐賢

形こそはなのゑまひはつくりけれ
こゝろの刄おそろしのよや

納凉　龜谷行

夏の夜の月をのせてやふねこかむ
洲崎のまつにかせわたるなり

朝梅雨　鍋島榮子

朝日かけさすやとまとを明て見れは
なほ晴かたきさみたれのそら

遠郭公　前田朗子

ほとゝきす卯の花かきをよそにして
鳴しはくものいつこなるらん

夏露　柳原愛子

かりのこす夏野のくさに露れきて
朝ゆくみちはすゝしかりけり

百合　小池道子

夏くさのしけみか中にましれとも
やつれさりけり姫ゆりのはな

江上螢　保科節子

ふく風にそよく入江のあしまこそ
螢あつまるところなりけり

樹陰水　日野西薫子

ほたるとふよるいかならん日盛も
汲ろてさむしまきのしたみつ

夏瀧　　大谷澤子

つゝらをり登るやま路に岩はしる
瀧のひゝきをきくぞ涼しき

瀧下蟬　　三條章子

高ねよりおちくる瀧のひゝきにも
まきれぬせみの聲しきるなり

雲間夏月　　小川直子

梅雨のなごりのくもは見えながら
たえまもりくるつきぞ涼しき

夏草　　河村重子

一すぢの道はまよはすふるさとの
にはのなつ草おひしけれども

牛飼　　安東菊子

朝な夕なやしなふわざをうしとしも
おもはて渡る世こそやすけれ

垣夕貌　　清水靜子

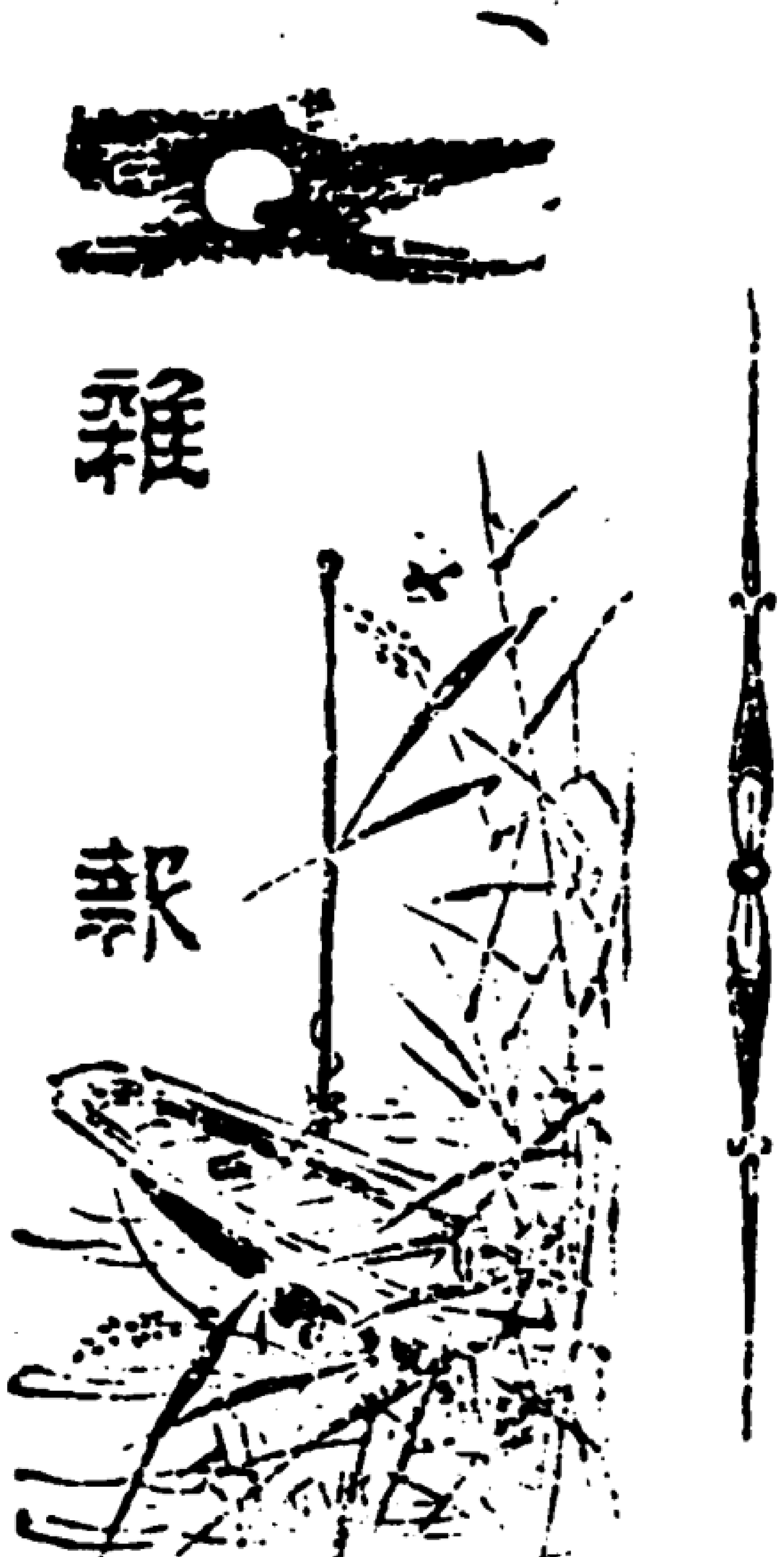
賤が家の垣根にしろきゆふかほを
とふらふ人の袖かとぞみる

夕立　　五十園の德文

六月としいへど、あらがねの土もさくるといひけんさることにて、日のまさかりには出たつべくもあらず。暑のおこたりたらんにこそとて日かげを西の空になしてぞ出立ちつ。汽車にのりてゆくに、うつりゆく野邊も山邊もくさ葉は更なり、木々の梢さへなえしなひて、いさゝかの風だにもなし。すぎつる方の空に一むらのうきぐもたち騒ぐよと見るほどに、こなたもつとふたがりて雨なんおちきたる。しばしがほどは、遠近のけぢめも見えず降りしきりてやがて後のかたより晴れゆきつゝ、なほゆく手の方へぞ

すぎゆくなる。今は野も山もいきかへりたらんやうにて、涼しさこの世ともればぬず。心地いはんかたなし。

飛ぶがごとゆくなるわれにまけしとや
きそふにたり夕立のあめ



雜報

●御還幸啓　天皇　后皇兩陛下は、去る四月、京都の御所にならせられし以來、今日まで御駐輦あらせられし處、愈〻來る廿二日八時五十分御發輦遊され、名古屋に御一泊ありて、翌廿三日午後四時東京へ着御あらせらるゝ筈なり。

●有栖川宮殿下の御歸着　曩に、英國皇帝陛下六十年祝賀式に　御名代として差遣はされたる　有栖川宮殿下は、去る十六日午前五時、横濱に、無事御安着あらせられ、各親王殿下、諸大臣の奉迎をうけ給ひて、直ちに東京に御歸着あらせられたり。

●故伏見邦家親王御息所の御祭　北白川宮邸に於ては、去し八日、故一品邦家親王御息所景子殿下の御祭典を御執行あり。在京各皇族、並びに御息所、及び御留守中皇族の各名代、德川、一條、二條、近衞、鷹司等の御近親、及び舊家臣一同參拜あり。本居豐穎氏祭主を勤めたりと云ふ。尙は來九月八日には御墓所京都相國寺に於て御祭典御執行ある筈にて、當日は各皇族方の御參拜あるべしとぞ。

●磯うつ波の碑　こたび佐渡が島に大水災ありて、各町村孰れも大なる害を被りたるよしなるが、

そのうち尤も惜しむべく尤も悲しむべきは、同島戀ケ浦に建てありし　承久の帝の「いざゝらむ磯打つ波に事問はん沖の方には何事かある」と申す　御製を刻みたりし碑の、激流の爲にさらはれて行衛知れずなりたる事なりとぞ。因にいふ、右の碑と同所に建立しありし　天皇駐蹕の碑は幸無難なりしと。

●後藤伯の薨去　久しく心臓病を患ひて病蓐に在りし後藤伯は、本月二三日の頃に至りて、病俄に革りしが、遂に仝四日にいたり、溘焉薨去せられたり。年六十、嗚呼　伯は維新元勲の先輩、その政治上に、又商工業に、伯がなしたる功績は、今敢て贅言を要せず、只國家の爲に、此の功臣を失ひたるを悼む。伯の病革まるや、事　畏くも　天聴に達し、三日の夜に至りて、左の如き御沙汰を蒙れり。

　　従二位勲一等伯爵　後藤象二郎

叙正二位（特旨を以て位一級被進）

仝八日葬儀を營む。畏くも　陛下よりは、日根野侍従を勅使としてさし遣はされ、靈前に、左の優渥なる玉旨を朗讀せしめらる。

勅語

王政復古の大義を痛論し群議を排し皇國回天の偉業を毗贊し以て國是を鞏す膽略機宜に應じ勳名時流に超ゆ今や淪亡を聞き曷ぞ哀悼に勝へん是に侍臣を遣はし賻賜を齎し以て弔慰せしむ

其の下賜あらせられたるは、

一祭資金五千圓

一白絹	五疋	一蒸菓子	二臺
一干菓子	二臺	一餅菓子	二臺
一菓物	二臺	一生花	二臺

皇后陛下よりも田中式部官をさしつかはされ、左の

祭資料を下賜あらせらる。

一金千圓

嗚呼、天恩優渥　斯の如きは稀に見る處なり。伯死後の榮亦溢せりといふべし。

●新高山　新領土臺灣なるモリソン山を新高山と御命名あらせられしは、さきに前號に記しゝか、今その記なりといふを見れば、ありしやうもよく知らるゝなり。この文は陸地測量部長陸軍少將藤井包總氏の筆になれりといふ。

巍々として峻高なるものは山なり。鞏固にして動かざるも亦山なり。故に古より君父の恩徳を表し、國家の安寧を頌する常に譬を富岳に取、蓋し富士山は我國山岳中の最も高き者なれば也。明治廿八年戰捷の結果に因り、臺灣島の我に歸するや、又是と伯仲する高山を得たり。モリソン山即ち是なり。此名は歐洲人の稱する所と云ふ。其七月參謀本部より測量部員を此島に派し、全島の測量に着手するや、參謀總長殿下、大本營の御前會議に於て、其事を奏上せられ、談此山の名に及びし時、陛下其測量完成の日に至らば、朕更らに之に命名せんと勅し給へりと云ふ。其後測量部は、倘、部員數班を增發し、土匪生蕃起伏叛亂の間を崎嶇間關して爲し得る限りを測量し、其區域徃々政化の未た逮せざる所に及び、昨年九月竣功し、爾來製圖に勉め、本年六月將に之を印刷せんとするに臨み、殿下は副官將校をして京都に至り奏上する所あらしめしに、同下旬參謀本部次長川上閣下の西上して、　天機を伺はるゝに及び、忝くも新高山の嘉名を下し賜はり、乃ち之を地圖上に銘刻し、以て萬古不易の名と爲したるが如し、子の始めて生

るゝや、父之に命名す、今　陛下の此島中第一の高山に命名し給へる、即ち亦以て此新邦を子愛し給ふの　聖徳を仰ぎ奉るべし。嗚呼　我大八洲今上陛下の御代に於て、更に此一大島を加へ、皇徳の益々高きこと此山の高きより高く、國安の益々鞏固なること、此山の動かざるより鞏固なり。畏くも　陛下の　宸慮を臺灣島に注ぎ給ふこと、前述の如し。臣民たるもの豈益々其經營に鞠躬して皇威を宣揚し奉らざる可けんや。

明治三十年七月　　藤井包總謹識

●臺灣の生蕃宮闕を拜す　本月十一日、長野撫墾署長につれられて東京に來りし臺灣生蕃人十一名は、去る十三日、通譯一名、支那人三名と共に　宮城二重橋の下に至り、うやうやしく宮闕に向ひていと殊勝にうちをろがみ、しばしはたくゆかしき御造りを拜して、寶祚の隆なるを感激せしさまなりしが、再び伏し拜み、肅然として立ち去れりといふ。一たび我が　皇城の尊嚴なるを拜するもの、誰か、乾徳のいや高きを思はざるものあらんや。

●忠魂の一村　丹波國北桑田郡山國村は、そのむかし、桓武天皇のみやこを山背に遷させ給ひしとき、御所御造營の木材を奉りしことありしが、その後此の村を御料地と定められ、山林守護職を置かれたることあり、されば此一村はわけて義勇奉公の志に篤く、一旦緩急あらば一村團結して國難に赴くを約し、之を山國隊と號す、現に元弘の際は大に力戰して賊を打ちたり、其後徳川幕府の際、年々大堰川の香魚を漁りて　禁裏に獻上し居りしが、東京遷都後、香魚獻上の儀全く中絶したるを以て、今度京都御駐

禁を機とし、村民は府知事を經て、香魚獻上の儀を願ひ出でしに、先頃宮内大臣より特別の御由緒あるを以て、本年限り獻上をゆるされたりといふ。

●父子の情　頃日、宮城縣登米郡吉田村に水災あり。洶水堤を決して漲り、狂流渦を卷きて溢るゝ際、其の水勢すさまじくて、施すに術なければ、村民はたゞあはてふためき　打迷ふのみなりしが、折しも一人の農夫(佐々木某)、此の激流に飛び入りて、浮きつ沈みつ水穴を探るに、溢るゝ水はいやまさり、穴はいづことも知るべからず、されど此の水をせきとめざれば、一村は擧りて流されをはらんと、命をわすれてうち働くに、その子なにがし、ことし十五歳になれるが此のさまを見て、父の危きをさけび、己父に代らんとて、着物ぬぎすて水中に入らんとする、折しも父は水面に面をいだし、汝は未だ年わかければ、あたらでとして命を捨つべからず、吾は行くさきもみじかければ、村民の爲に余名をすつるに何かあらん、汝は世に在りて母の手助けせよとて再び水に入らんとするを、子はやらじとてあらそふ中に、天のたすけか、水は次第に止まりて、此の父子も命を全ふし、村民も事なきを得たりといふ。めでたき談にこそ。

●仙臺市高等女學校　は、本年より新設することゝなり、全市元寺小路に地所三千余坪を買入、新築の計畫あり。校長は、元の茨城縣師範學校長たりし國分行道氏なりといふ。

●帝國教育會　にては、ことし十月二十二、三、四日の三日間、各府縣聯合教育大會を東京に開くべきにて、その議案を各府縣教育會に送れりといふ。その議案。

一、義務教育年限を延長すること、義務教育を普及すること、何れか急務なるか。
二、小學校生徒に地理、歴史、理科の教科書を携帶せしむる可否。
三、本邦尋常中學校の教育方法として、寄宿舍生を強行する可否。
四、尋常中學校の入學制度を高むる可否。

●加藤清正の寶劍　山形縣鶴岡町に本住寺といへる梵刹あり。加藤清正妻子の墳墓を存する由なるが此の寺の什物中最も珍重すべきは、鄕義弘の作にかかる清正遺愛の寶劍なり。長さ七寸餘にして裝飾古色を帶べり此寶劍は、清正が豐臣家の末路まさにあやふかりしとき、事の重きを一身に負ひて、淺野幸長と共に秀頼を守護し、淀川を溯つて京師に入り二條城に於て家康と會見したる時懷中に藏めて主家の安危を繫ぎたる寶劍なりと。清正の子忠廣、領地を削られて庄内に放れたる時、父の紀念として此寶劍を携へ來る、即ち今に至りて此劍の、忠廣の墓とゝもに本住寺に存する所以なりとぞ。

●米國人日本名所案内を編纂せんとす　我が國は山水の風致に富みて天然の美境たるは、夙に外人の知る處なるが、其の來遊の便を謀らん爲にか、此の程より、米國人、日本名處案内を編纂すといふ、頃日築地居留地に居る仝國人ベーカに向て、本國人より淺草公園なる二名碑の石摺を求め越したるにより、ベーカは淺草傳法院に至りて之を問合せ、且つ石摺の承諾を得て、同公園念佛堂脇なる加藤千蔭の花塚、及塵塚地藏の裏手なる佛頂尊陀羅尼の二碑を寫して、之を本國へ送る事をなしたりとぞ。

●臺灣語學校生徒の參拜　臺灣國語學校教授本田嘉種氏が、修學旅行の爲め引連れて上京したる同校生徒廿餘名は、本月一日、比谷皇太神宮の月次祭に參拜し、莊重なる祭式を拜觀したる上、各玉串を捧げ最と鄭重に敬拜せり、終て藤田事務取扱は、當神社

は伊勢大廟の遷にて、伊勢皇太神宮は我　天皇陛下の御大祖なる事より、我皇統の世界に冠絶して尊嚴無比なる所以を說き聞かせ、同校雇土人郭廷獻の通辯にて、一同頗ぶる感銘したる有樣なりし、夫より神酒を戴かしめ、茶菓の饗應ありて、懇切なる待遇を受け、十二時頃退散せり。尙、同行は、伊勢皇太神宮にも參拜する筈なりと。

●婦人の聲調高き理由　を發見したりとて獨逸の婦女エムマサイレルと云へる人の說く所は、婦人の聲門には、別に楔形の小軟骨二個あり、是最高調の音を發し得る所以なりと云ふ。之を發見するに至りたる迄の事情を聞くに、同女は二人の子を抱て良人に訣れ、其日を送るの策路として音樂の教師となりたるが、不幸にも其職業の種となる音聲、一朝にして忽ち枯れたれど、今は如何ともする能はず、徒に天命を喞つのみなりしも、一日ふと、何か故に斯く聲は枯れたるやと思ふにつけ、他人にも此不幸に陷らしめざる爲め、若し法あらば適當なる唱歌法を工夫し、決して音聲の枯るゝ憂なきを得せしめんとて、其より解剖學の研究を始め、種々發音機關を熟察し數年の後斯く顯微鏡下、右二個の楔形小軟骨あるを發見したるなりとぞ、男子が如何にするも、婦人の如き高調の音聲を發する能はざる全く之が爲めなりと

●飲食の注意　飲食物には常に注意を要すること勿論なるが、殊に暑中は物の腐敗も早く、流行病等もありがちのことなれど、一入心すべきことなり頃日來新聞紙にて見る處にても、中毒にて非命の死をとぐるもの尠からず。今、食ひ合せの心得、と云を得たれど、衛生の一端にもと左に掲く、

蕎麥と豚、索麵と葡萄、索麵と田螺、麵類と棗、

蕎麥と鰹、章魚と梅干、鰻と梅干、菊菜と芥子、胡蘿蔔と芥子あへ、ラムネと茄子、蟹と氷水、蕗と蟹、蝦と蜂蜜、西瓜と熊膽、南瓜(ぼうぶら)と寶丹、鰊鯑と熊膽、赤飯に鰒、海老と高野豆腐、牛肉と薐波草、家鴨と生姜、鷄卵と薯蕷汁、桃栗さ砂糖、酒と胡桃

●歐州諸國の結婚期　婚姻の時期は、氣候習慣に因て、各國同からず、澳國に於ては、男女共十四歲にて一家を爲すに適せる者と認め、獨國に於ては、少くとも男女共十八歲に達せざれは婚姻す可らずと爲し、佛國にては、男を十八歲、女を十五歲と爲し、西班牙にては、夫たるには十四歲、妻たるには十二歲たるを要す、匈牙利にては、舊敎のものは男を十四歲、女を十二歲と爲し、新敎にては男を十八歲、女を十五歲とせり、希臘にては、十四歲と十二歲を以て男女の婚姻期となし、葡萄牙にても亦、男を十四、女は十二と爲せり、露國、及びサギソニーにては、少なくとも男子十八歲、女子十二歲に至らざれは婚姻すべからずとす、瑞西にては、男子十四歲、女子十二歲に達せは既に婚姻し能ふ者となし、土耳其に於ては、男女共適當に宗敎の敎義を了解するに足れば既に結婚し能ふ者とせり。

◎手風琴獨奏　名の如く風琴を獨奏するのしなりなり、小林氏郎氏の編纂にして、白井規矩郎氏の校閲にかゝりしものなり。此迄此の種の書世に尠からざるに、此ぞと思ふものなく、あかぬこゝちするまゝに編みたりといへば在來のものよりは勝りたる處あるへし。猶此の書の特色とすべきは、唱歌に新曲を撰び、軍歌に奇快を採り、俗曲は野鄙なるを訂正し、歐州歌は他書にありふれざるを集め、總數一百余曲をおさめたることなり、以て此の書の如何を知るべし。

神田　同文館發行　定價二十五錢

教の庭



八月廿日兼題　電信

天　愛媛縣松山市二番町八番戸　上野君子

いにしへの雁のつかひもはりがねに
ことかよふ世はたのまざりけり

地　山口縣佐渡郡島地村　宇多田揚子

ときのまに千里のほかもおとづれて
とほきさかひはなき世なりけり

人　伊豫松山市鍛砥町十八番戸　野中あさ子

天路ゆくかりのつかひもおよばぬは
此のはりがねのたよりなりけり

秀逸（十首）

厂かねのつむさにかけしためしにも
まされる御代のおとづれぞこれ　住山嶷子

かりがねもたのまずなりぬはり金の
たよりたやすき世となりしより　名取正代子

とつ國のきのふのこともはりかねの
たゞひとすぢにけふぞしらるゝ　美奈井芳子

時の間にちさとのみちもかよふなり
たゞひとすぢのいとをたよりに　竹村貞子

あまくものとほきちさとの音づれも
またゝくひまにかよひぬるかな　降田まさ子

ときの間に千里へだてしおとづれも
まかねのいとによりてこそきけ　植木鋼子

引きはへし糸にかけ來るおとづれは
これもへむ奇しきしわざなりけり　弘田ゆき子

天かけるとりのたよりはむかしにて
千里にかよふはりかねのつて　吾妻ちか子

いかにしてたくみなしけん引きはへし
いとよりかよふちゝのことのは　林久子

時の間にちさとをかよふことのはは
このはりかねのいとやひくらん　廣田とめ子

（以下原稿到着順）

ほささほき國のたよりもはりかねの
いとやすくきくみ代そうれしき　永井さい子

こと國の千さとのそともときのまに
おとつれてゆくかれのいとすち　木川里子

つかの間に千里にかよふたよりこそ
ひらけ行く世のめくみなりけれ　高島壽子

いなつまのかけより早くはりかねを
つたふたよりそするどかりける　佐々小琴子

はりかねをつたひてうみの外までも
かよふたよりもひらけ行く世や　佐々有鄰子

一すちの糸のちからをたよりにて
ちさとのほかのことをこそきけ　武政常盤子

ひとすちの糸にたよりはきかれけり
千里のほかもゐながらにして　池田讃子

厂かれのつはさにかけし世のひとに
見せまほしきはりかねたより　坂田きみ子

すゝむ世はいとたよりよしはり金の
とつくにまてもときのまにして　高木ふさへ子

うみやまをこえし千里もときの間に
たよりかよはすかれのいとすち　杉浦芳子

ひらけゆく世にこそ有りけれ百千里
いまのおとつれいまにきくとは　德永萬壽子

ひらけゆく御代そたふとき束の間に
千さとのよそにかよふことのは　岡崎きさ子

一すちのまかれにかよふことのはは
またゝくひまにやまのおくまて　土肥仙子

時のまにちさとへたてしたよりさへ
なしうる御代そうれしかりける　富士村讃子

はりかねのなかき糸にてつたふれと
またたくひまにきこえけるかな　富士村ひさ子

うみやまをへたてゝ遠き道なれと
またたくひまにつたふうれしさ　林琴子

世とともにすゝみてはやき電信は
日にいくたひの行き來なるなむ　齋藤春子

つかのまに千里のみちのおとつれを
人目にふれすかよふはりかね　齋藤千子

時のまにことのたよりはかよへれは
ちさともいまはとなりなりけり　西甑子

いにしへの人に見せはやつかのまに
ちさとをかよふはりかねのいと　眞島千鶴子

たよりよき世とはなりけり束の間に
ちさとをかよふはりかねのいと　矢島にい子

はり金のいとのちからにかけてこそ
ちさとのたよりとききまたて知れ　田中ねん子

飛ふ鳥もいかておよはんいとすちを
とほきくにまてひきわたしては　木村きく子

いなつまにもとつきてこそ始めけめ
ひらけゆく世のしるしとそ思ふ　右田藤子

いとはやきいとのたよりに思ふこそ
かたりあふよにあふそうれしき　石川類子

誰かめにもくすしきことを思ふらん
うみやまかよふいとのことゝひ　石川樂子

はりかねのたゝひとすちに思ふこと
千さともかよふ御よろたのしき　石川久子

いなつまのたよりある世はいく千里
へだつるくにもとなりなりけり　江口とみの子

時のまにちさとゆきかふはりかねは
ひらけ行く世の道志るへなり　宮地こと子

うちみれは風のみわたるはりかねの
ちさとのたよりいかてなすらん　石﨑まさ子

さきのまに千里をかよふはりかねの
いとたよりよくなれるみよかな　白石梅子

はりかねの便りよき世のうれしさは
ちさとのをちもとなりなりけり　宇高まつ子

すみやかに遠きにかよふたよりこそ
ひらけゆく世のめくみなりけれ　綿野りき子

とみのことを糸にたよりて時のまに
ちさとかよはすきみか御代かな　諸井貞子

うみ山をへたてしひなもさきをへす
たゝひとすちにことゝひそする　田部さだを子

ひらけゆく御代の志るしか千里路も
へたてぬひとのことゝひそする　田部まさを子

海さかもせかぬ御代とてはりかねの
いとをたよりにつてもこそすれ　田部里子

いちはやく千里にことをしらするは
ひらけゆくよのしるしなるなむ　秋野こはき子

ひとすちのそのはり金のゆきかひに
いとたよりよきよとなりにけり　廣田しも子

ちさとをもまたたくひまに音つるゝ
たよりうれしきいなつまのはり　野木常子

あまさかるひなのたよりも都路に
はやく知らするわさそこのわさ　日吉あさ子

いくち里はなるゝくにもとなりにて
またゝく間にもかよふことのは　長山孝子

つかの間に海山かよふはりかねの
いともひらけしきみか御代かな　山田琢子

ももちさとへたてぬれとも音つれは
つかの間にこそきくへかりけれ　仁保志磨子

つかの間にきくそうれしき百千さと
へたつるをちのひとのおとつれ　尾多福子

はなれすむをちかた人のおとつれも
つかの間にこそきくへかりけれ　三浦島子

いなつまの影よりはやくおとつれを
千さとへたてゝきくそうれしき　白井とま子

つかの間に千里のそとのおとつれも
いと一すちにきくそうれしき　磯野たま子

開けゆく世は言の葉もつかの間に
　とほきちさとにつたへゆくなり
福原菫子

國といふくにのはてまでひとすぢに
　こととふ糸のはやくもあるかな
松枝雪子

文かよふみちもひらけてつかのまに
　ちさとのそとのことも問ふかな
石原宜子

千里へしとほきこころもときの間に
　ことばかよはす御代のうれしさ
香野梅子

いなつまのちからによりて一すぢに
　とつくにまてもかよふことのは
岩本さく子

あつさゆみ矢よりもはやくちさとまて
　かよふたよりもかねのいとすぢ
矢野みち子

ひとすちの糸のたよりにとつくにの
　はてまてかよふ露のたまつさ
杉本雪子

たよりよき御代とはなりぬ時の間に
　ちさとにかよふはりかねのいと
戸塚てつ子

ひらけゆく御代のひかりにぬは玉の
　よるさへみゆるはりかねのいと
池谷富子

いなつまのうつれる糸にとつくにの
　ことはもはやくつたへきにけり
諸井久真子

いなつまのひかりと共にことの葉を
　よそにつたふるはりかれのいと
木村みつ子

たのみてもいかゝとみつるはり金に
　ことはのこともつたへけるかな
中桐杏子

まきこめし人のことはなもれもなく
　とすはりかれのたよりうれしも
柳田里子

開けゆく御代のめくみははりかねに
　ことはのはなも咲きにほひけり
舘脇ます子

言の葉のはやくかよひてわたの外も
　いまはとなりのこゝちこそすれ
河村まさ子

かきりなく遠きさかひもいとかれの
　またゝくひまにかよひぬるかな
安井うめ子

海そこにくかてふくかもときの間に
　おもふことはのかよふ御代かな
岸せつ子

これありてうれし悲しもつかの間に
　ことゝひかはすことそたやすき
香川須子

蜘蛛のひくあみにもにたり都路も
　ひなにもかよふかれのいとすち
青木春子

ことの葉をたゝひとすちの金のいとに
　かけて千さとのそとなしるかな
松於香濱子

時の間にちさともかよふはりかれは
　御代のひらけししるしなるらん
石川さく子

便りよき御代となりけりときの間に
　ちさとのそとのことも知られて
石川すけ子

とつ國のはなしもいまは居ながらに
　きくもうれしきはりかれのつて
萩原章子

八月廿日兼題　團扇

天

麹町區元園町一丁目六番地　白井とな子

骨いと細く、肉いと薄き身ながらも、いやたけき武士といさをゝ比ぶべきものは、團扇になんある。やけんばかりの三伏に、一陣の涼風を送るのみかは、蚊軍の、ほそ聲になのりて、羽風さへみのほどににくゝ攻め來る夕ぐれに、主のため其骨を折り、肉をさくものを、一度秋風吹かば、忽ちその功を忘らるるをも愁へで、唯夏を已が一生と、其の職に安するとし思へば、あなたふとや。

地

山口縣佐波郡島地村　宇多田やう子

古歌に「みな月の照る日もいかて過さましたのむ扇の風なかりせ」ばと、けにこの頃の、黄金も溶くる斗りの暑さには、木の下陰も水のほとりも、露ばかりの風たになくして、中〳〵に得堪へかたきには、誰かこの團扇の風を命とたのまさるものやはある、けに涼しき風のやどりとももちはやされ、朝な夕な時の間も手はなたす賞てしたしまれて、夏はこよなきたからにこそ。

人

甲府市山田町　名取正代子

てりはたゝくこの頃の暑さは、げにもゆる火のほなかにすめる心地せられて、骨にさへとほるばかり堪へがたく、庭の遣水もにえかへり、木陰さへ露ばかりの風もあらぬ日は、いかゞはせん、かゝる折、命とたのむべきは、つきせぬ風の宿しめたる團扇になんありける。誰が手にも取りてならせば、忽ち風の起り來て、涼しさいはん方なし。されば、あなあつしといひろひる頃より、晝となく、夜となく、手許はなたでめではやさぬ人とてはなし。ましてめでたき山水のけしき、清き流れに月影のうかべるさま、あるはみゆきのましろにふりつみたるなどを、ゑがけるは、ことに見るだに涼しき心地せられてなむ。

（以下原稿到着順）

佐々有鄰子

團扇の形は種々なるに、軍配團扇あり、唐團扇あり、琉球には、木葉もて造れる團扇さへあり。妾が近鄉の山鹿蠟曳團扇は、花鳥の畫を彩色せるものなり、天下に名高く、東洋はさらなり、西洋各國にも持ちはこべるは、一年に幾萬本といふ數をしらすとなんいへる。かく製造の多きは、黄金の土もさくへきてる日の頃の、風なきに、涼氣を起し、あつさをよそにうちはらふものから、深しほやくあま

が見も、嵐山かつも、一人として手ならさぬものもなきは、此の山鹿蛾鬼團扇にぞありける。あなかしこの品物や。いさうるはしき製造や。

降田まき子

やよ團扇よ、なが形のまごかなるは、月にたとへつべく、なが骨のやさしさは、吳竹のすなほなるとて造られたるならん、そも、なれは何の爲に世には生に出でたる、なれがつとめは何にかあらん、いで、しばし、こゝに物語らん。世は夏となりて、久方の空には日の光りてりはたゝき、あらかねの土もさけなんばかり、そよとの風の音なひもなく、夕立雲のさまよふさ、見るまに、やがてちり行きて、人皆のあつしく／＼とわぶるかり、一度汝を手ならさば、いづこより出來るらん、いとも涼しき風の打起るこそ、くすしけれ、されば、老も若きも、高きもいやしきも、皆なれを手ならし打あふぎて、晝間の暑さをしのぎ、いともうるさきさばへをはらひ、夕にはいぶせき蚊を追ひ、少女が手にもたれては、螢を打つ料ともなるなど、夏の日にはひたすら汝を賴み、汝を愛しみてぞ、過すなる。汝が幸、汝がいきほひも。また大なるかな。やがて、秋立ちて、吹く風、涼しうなり行き、蟬の羽の衣のうすきをかこつ頃となれば、今迄の榮華のゆめは、さめはてゝ、なれをかへりみるものとてなく、そこここに打やられ、くものすにまかれ、物のすみなどに入れられ、たゝかまどの下を、あふぐに用ゐられ、骨もあらはになり行くこそ、いともはかなけれ。こもなべて物事盛衰の理にやあらん、さはいへ、また世に出づるときもあらんを、しばしたへ忍びてまつべきなり。

木川里子

露命の土とへさくさいふ水無月のころは、團扇はかりいみしきはし、あつきひるまは、うみはてし眠をさまし、夕暮よりは、むらがりくる蚊をはらひ、ねばしも手をはなさず、實にこれなくば、いかで夏のくるしさをまぎらすへき。また出てはてぬ月さみるまで、かくせし袖をはらひ、手すさむままに、わが身ばかりに秋は立つとうたがはる、かよひくる風は天なる桂陰によりふきおろすこゝちせられ、つきぬすずしさいはん方なくなんある。されどかくなつかしきもののかぎりにいふなるも、いつしか西風の音やや身にしみ、桐葉の落ちそむるころともなれは、かへりみる人たになくなりゆくは、時世にうつろならひとはいへと、實にいひがひなきむなりかし。

西艶子

いぶせかりつる、五月雨も、いつしか過ぎて、田草とる人の、思ひきやらるゝ頃より、世に出て、人々にもてはやされ、蟬の聲くるしげに、水田のみづも、湯とやわきなん、よもの靑葉も、今は色なき、こゝちせられて、外の方をながむれは、目もくらむばかり、そよとおとなふ風もなき頃、人ごとに、あな暑し、あつしあつしと、打あへぎつゝ、かた時もはなしがたく、ただひたよりつ、まいて、むしあつう、れもやられぬ夜など、よもすがら手をばなたて、むつみ、親しむものあり、そは何ならん、云はでも知るき、團扇なりけり、そも、うちはてふもの、いつの世に、たがつくりそめしかは、知るよしなけれど、其のかたち、扇の如く美しう、みやびやかにはあらねども、いとやさしう見にくからで、其の吹きおこす風は、扇にもまして涼しきは、かれにもまさる、こころにやあらん、されば、うちひさす、

花の都より、天さかる、鄙のはてまでも、あまねく、家々に用ひられて、高きいやしき其の大方の人に、風なき折のたよりと、あふがるゝぞめでたき、打そよぐみとりの稲葉浪たちて、庭もせの草のしげみに、すゞむしの聲涼しう、露の白玉散らしもあへず渡りくる、すゞ風、月の光のすみ渡りたるなと、かゝる夕や秋は立つらんと、いとあはれなり、されと、さしもむつみ親しみつる團扇さへ、涼しう凌ぎよくなるまゝに、受けしめぐみも折忘れて、いつしかうと〱しう見もかへらぬぞあさましき、さても、汝れがめぐみにより て、凌ぎがたかりつる夏の日も、から〱過しきつ、かゝる涼しき秋のはじめとなりぬれは、いさ、これよりなれにひま取らすれは、秋冬春に心ながく、骨やすめして又こん夏に、ふたゝび涼しき風おこせかし、汝がいさをの、高きにつけて、忘れつる身の、いさをもなくてなむ。

右田藤子

春の花のなごりもなく夏にいり、あつさはげしく堪へがたき頃は、何を命とたのむにか、天然の風をたのみ、すぜたゐし折は、團扇を以て暑をはらふなり、此品もし世になからんには、如何で其暑さをはらふべき、しかるゆゑに、夏節には團扇を最要品となすべきなり、嗚呼實に世の要品なるかな。

江口さみの子

土もさけかれもさけなん暑さたとへんかたなき此ころは、裁ち縫ふ業さへ物うくて、庭の面を見渡せは、この葉も皆しをれたるに、暑さいやます心地ぞする。かく堪へがたきには、たゞこの團扇こそ親しき友なりけれ。しばしもはなたすてならしつゝ、夕くれのやゝ涼しうなりぬるにも、また蚊さへおそひきて、涼むまもうちおきがたし、よにこの團扇てふものゝなからましかば。

菫野露子

いとゞ短かき夏のよすがらを、あつさに堪へ得で、明かしつ、旭の東雲高くさし昇れば、緑り濃き木々の葉に映ろひて、目も眩まんばかりなり、そよとだに、あはれを運ぶ風もわからねば、手馴の團扇かざしつゝ、僅かにあつさを、しのぐも苦し、げに、この團扇よ、金とけて土さへさくてふ夏のあした夕は、束の間も傍去らでめでられつゝ、人のあつさも救ひしものを、いかに無情の世とはいひ、萩桔梗の花もうたくほゝゑみぬれば、漸くに愛でつる人も、秋風に、誘はれて、終にまたく、捨てらるゝぞ、あはれなる世の榮枯盛衰の程、思へば、あゝ團扇のみが果敢なきものにはあらずかし。

朝霜きみ子

なべて、夏のあした、夕は、涼しくもすが〱しきものなれど、てりまがるひるの程の、いとも苦しければ、いかにかせましと、松の大樹の下にやすらへば、そよとだに秋をはらふ風もあられば、いつもの團扇に、風をもおくらせつゝ、やがても萩の下葉は色つきて、蝉の聲あはれになり行くまゝに、團扇やいかにと見かへる人もあらばこそ、あゝ、つれなき世とはいひながら、昨日の花の夢さめて、今日は、無慚の、秋風ぞ吹く、あな果敢なしの團扇の果てぞ。

田部里子

うちはは紗采などに携帯の由、蚊はへと撲ち拂ふ者なればいふとか、物知らぬ身のこと〱しくあげつらふへきあられど、實にかゝるものにや、夏の例とて盃の間いぶせく蝿のむれたるを撲ち、夜遊には

蚊てふ虫のねたへのばかりさすさへ拂ふもなかし、またゆふまぐれそこはかさなくそゞろありきもつゝ、かはべ近きはしゐにおさなへばあるじの、月もあざやかに風もいさすゞしかれど、蚊のおほさになん、いざたまへなど、打語らひつゝいだすもなかし。

白井　さま子

あらいぶかしや、志ばし書にさらしし眼の、いつしか螢り、よう物見わざるは、おろかや朝よりてりかゝやきし砦に、志たゝる汗の目にいりてくらみしならんさ、あやしのいよすまきあげつゝ、外のかたをながむるも、梛の風だにないゝ、草木皆うちしなれたるに、蟬の聲のみぞ獨りかしましき、げに莊が夢に蝶さなりて逍遙せしは、かゝる時をやいふならんご、恍惚さしてありける折から、ゆかしき風の吹き來るに驚き觀れば、親しき人の、さこそあつからめさて、團扇の風を送り給ひしなりけれ、すゞしくゆめの心地もさめて、うちつゞきあふぎたつるに、そゞろ暑さも忘れんばかりなり、けにこの君なかりせば、いかで此の日頃をすぐさましや。

植木　鍼子

夏は團扇にまさる親しき友こそながんめれ、風おそき湖庭のそゞろありきにも伴ひ、暑さかしこき日中のころは、絶わず手馴して、草木にしらぬ涼風を迎へ、はし居る夕は、待ち出づる月の影にもなずらへ、ねやの夜床を拂ふまで、この團扇のなかりせば、いかにして夏の一日をすぐさめや。

弘田　ゆき子

てる日のさかりには、庭の吳竹にうよさふく風も見わねば、午の貝ふく頃は、世に堪へがたくて、生さしいける者皆の中に在るがごさ思ひなやみて、難波潟あしかるけになかされつつ、佗ぶらむ者もまはならむかし、かゝる時しも、奇しく手に取れば、容易く風を起すなる此の物よ、掛けまくもかしこき、科戸の神のことはに、より居ますらむさ思へば、忝くなつかしくして、東の國もうちは從かれぬ此の物よ、げに此の頃の、靑人草のいのちなるかも。

林　久子

堪へがたきなつの日盛りも、ひさりよそけなるは、この團扇にこそあなれ、いかにむし暑くかぜなき日も、手にされは、いきかへるこゝちのせられてすゝし、されは、夕へのそゝろありき、月まつよひのはし居にも、こよなきさひさこそめてらるれ、秋かせたては、手にはもふれぬ人の、心のあたなる、うらみをさへわすれしやうなるこそいさあはれに、なつかしけれ

松於香　濱子

夏の日の、てる日さかりの、あつさはかり、たへかたきはあらしかし、文よむわざさへうみかちにて、あだしわざは手につくべうもあらす、只たのむは、うちはの風のみ、ひるの最中は、ちりはかりの風だに音づれねば手もたゆきまで打ならして、やすむまもなし、まいて日かけかたぶかばさ、たのみたりし夕べのいさゝむしあつうていねられぬなりなど實にやよもすがらうちはの風ぞいのちなる、このうちはよ、かくはかり功多かるに、やかて夏もすきぬれば、うたてかへり見る人たになきあはれさもあはれなりや。

團扇　つかひやう

なにがしの女

有住常子門人

宿からぞ月の光もまさりける、よのくもりなくすめばなりけり。五月雨にみつのみまきの眞菰かりほすひまもあらしさぞおもふ、庭の面にからの錦をしく物は、なほさこなつの花にぞありける、このほかに、池、菖蒲、郭公、螢火、照射などの歌の心をかきたるさまざまの扇を、取出て進められたらんには、講師つれなかの辨になりたるこゝちして、さりざりになさめつべうなむ、

また黒柿のほねのこゝのつあふに、黄なる紙ものせるをつかはせたまへやさて、あらんには、やならさりておもをさしかくしうちもゑみつべし、これらの扇にはあらで、白かれのみづがめにさしたるくざくのを、るりのつぼにいれたるこがれ、むらごのきぬに包みたる廿疋のきぬ、しろかれのふたにませゆひてうゑたるなでしこなどゝひとつらにあげられたる、榮花物語ころもの珠の糸、思ひいでらるゝこのうつくしうめづらしうつくりたる物よ、手にはさりあぐるものから、ゆらゆらとさせんやうもおぼねぬくちをしさよ、いかにいかにせまし、今のうろしなどいふやうに賜らせ給へる、御車の志りにゐたる殿上人の、色々樣々にて、あかき扇を、つかひたりしやうに、ひらめかさんも心なけなるべしこのひさつのものをだに、つかふべきすべもねざらんは、いさはづかしうてなん、

さ暴ひたるに、ふさこゝろつようなりぬるは、さしごろをしへたてたまふ、[illegible]師のをしへのをやのみめぐみにはべり

つはんやうは、貴人のみまへにて、こさもなうつかひたらんは、なめきことなり、さありさて、つかはざらんも、あせいでゝくるしう心なうもまたなめげにやなりゆかんかし、たゞなかばそよがせて下座にむくべうおもひゐて、左の手をつきて、すこしうつぶきて、ますづかにちよちよとつかべきものにはべる、さをしへたまひたる事ありけり、あなうれしさもうれしやさて、風をおこすに、なつの日のいみじきくるしさもわするゝ物か。

◎女鑑歌文月並兼題

九月五日	歌……野逕萩 文……窓の燈を見て	八月廿五日〆切
九月廿日	歌……松間月 文……辭世の振舞をとふ	九月十日〆切
十月五日	歌……籬菊 文……祖先の祭日に友を招く文	九月廿五日〆切
十月廿日	歌……海邊紅葉 文……茸狩の記	十月十日〆切
十一月五日	歌……深夜時雨 文……長々病み臥せる人に寄す	十月廿五日〆切
十一月廿日	歌……落葉滿庭 文……新嘗祭	十一月十日〆切

歌文兼題は必〆切期日迄に本社に到着する樣送らるべし期日に遲れたるは總て沒書とす。

いさよひの日記に、さやの中山をこゆる程ことのまゝとかやいふ社のあたり道いとおもしろしとかゝれたれば、今もさいふ社やおはすととへどもしる人なし、

かきおきしむかしの人の言のまゝにたつねてを見ん神やいますと

菊川をわたるに、承久のいにしへ、宗行の中納言、西岸に宿して命を失ふとかゝれし事おもひ出ていとあはれなり、大井川はよへよりけさまでの雨にみかさまさりて、行人おほくは金谷の宿に滞留せしが、すこし水おちて、かみ、なか、しも、先をあらそひわたるさま、かの宇治川の先陣をいどみしむかしのおもかげ心にうかひぬ、予は川越男あまたぐしたれば、第一ばんに着岸して、けふの先陣よとたはふれぬれば、めしつれたるやつこどもおとがひをどきてわらふ、わが故郷の千年川を、山城にて大井川といふは、大井の里をながれくるゆゑの名なり、今此川上にも左やうの邑やあるとゝはまほし。

廿二日　島田を出て瀬戸川をわたり、道の左りに櫻のやゝさかりにひらきたるを見るにも、抱琴園を立出し時、まだつぼみし梢もこのごろはさかりならましにとおもひやりて、ふる里こひしく折から、杜子美か感時花濺泪といふ句をおもひ出て、

ふる里の春やいかにと東路の花にもそゝくわがなみだかな

藤枝、岡部など過て、宇都の山にかゝるほど、肩輿をおりてかちよりゆく、在五中將の集

にわかいらんとする道はいとくらうほそきに、つた、かへてしげりてと書給ふに今は峠をきりたひらげて、道いとひろくつくりあらため、京、江戸ゆきゝの人あし、そのつたかへてよりは、こよなくしげれり、

いにしへの蔦の下道ふみかへて人めそしける宇都の山越

まりこ川をわたるとて、

宮人の春のあそひのまりこ川けあくるなみを袖にかけつゝ

安部川をわたり、木枯の森を西の方にながめ、駿河の府中にいたりて淺間の社にまゐる、莊嚴のさよらは都かたにもたぐひなくぞ拜したてまつる、細工のはりものなどこまやかに侍らんとて、ふところより髪髢(ヌカチ)とりいてたるにげふは江尻まで着さふらふべしとていそがはしげに催しぬれど、大かたにて下向し侍りぬ。

廿三日　江尻をたつ、清見寺にのぼりてしばらく眺望するに、老眼もいとさわやかなる心地ぞするや、

きよみがた浪間はるかにながめやるめちにはさはる關の戸もなし

田子の浦、富士の勝景、いへばさらなり、まことに東行第一の壯觀、いにしへより歌人詩客こゝろをつくしことばをみがきたる秀逸あげてかぞふべからず、予も心ある身な

りせぞなにくれの趣向もありぬべけれど、ともより雅境にたちいらざりし悔の八千たびも今さらかひなし、されどとてこの佳境にいたりてもだしはてなんもむげにくちをしければ、

七そぢのかしらの霜とくらべ見ていつれたかけん富士のしら雪

またや見ん田子のうら波富士の雪あふさきるさの春のけしきを

過し萬治三年の秋なりかし、竹園（圓照院貞致親王）故幕府（家綱公）へ御對顔のため御下向ましましける時、慈光寺冬仲（中務太輔）のぬしとともに供奉せしに、詩歌の唱和數篇におよびたりし事ふとおもひいでゝ、しきりに懐舊のなみだおさへがたし、宮も冬仲もいつしか黄泉にかへり給ふに、翁ひとり殘りとゞまりて、老の後またこのさかひに遊ぶ事、それもへをつれなき命ぞかし、そのをり宮の御うたあまりありしなかに「あつまぢにくだりゆく世のうきふしもわすれてむかふ富士の山まゆ」とよませたまふなんいかなる御こゝろにか有りけん、この外例のわすれ侍りぬ、浮島が原のひろ／＼としてあしたか山のみぞりをひたせるは繪にもかゝまほし、けふは空こゝろよくはれて四望くまなくいとおもしろかりき、沼津にやどる。

廿四日　曉より雨をやみなくふり出でたり、亭のあるじ、むかしよりたび／＼見なれ

たるものにて、ねんころにものしけれど、けふは雨やどりして此はせをこたりける日記をつくのふ。

廿五日　きのふの雨なごりなくはれたり、沼津を出て三島の社にまゐる、當社は伊豫の國三島と御同體なりとて暫く法施參らせて、

　後の世をいのるこゝろをあはれとも見しまの神に手向てそゆく

箱根山にかゝる、初音か原のわたりにて人のかたるやう、過し比奥州より出たる巡禮をのこ、此所にて歌よひべいとて「鶯よ初音ぶんだせきくべいなせになかないわにだんべい」といふ廿九字をつらね侍るとて笑のゝしるをきくにも、予がいつも口どくうなり出るこしをれをも、かたはらよりきゝたらんには、又さなんわらはるべしと耳いたくぞおぼゆ、四里ばかりのぼりて驛につき、かれいひくひてしばらくやすみ、關所をすくる、これも關守の嚴重なる事荒井におなじ、權現の御社にまゐる、滿月上人草創のよし東鑑にみえたり、湖水のみどりいさぎよく、峯の梢めぐみわたれるに、山櫻のかなたこなたににほひ出たるけしき、又たくひなき境地なり、とゞまりはつべきにあらねばかへり見がちにて、

　峯ふかき箱根の山の春かすみたゝまくをしくかへり見るかな

旅すべり、かしの木坂などいとさがしき道をくだりて、湯本、早川など過て、こよひは小田原にとまりぬ、海ちかけれど浪の音まくらにひゞきていとゞ寝覚がちなり。

廿六日　小田原を出てゆく〳〵小余綾(こゆるぎ)磯はさしも名だかき所なれどしばらく立とまりて、

　れきつ風岩うつなみはこよろぎの磯山さくらちるかとぞ見る

大磯の宿へいらんとて道のかたはら清水のながるゝ所に鴫立澤といふ文字を石にゑりたるをみて、乗物よりおり、寺内にあないして西行上人の影を開帳させ、やゝ久しくやすみて立いづるに、住侶予が袖をひかへて、心なき人にはれはせしなどたはふるゝ、折しも鴫のなくをきゝて、

　鴫たちてあはれさひしき秋もあれどうくひすきなく春の夕ぐれ

ところへてともにわらひて過ぎぬ、平塚をとほり藤澤へかゝる、右のかたに鎌倉へゆく道あり、かまくらはわかき時二度まで見つれど、此たびは立もよらず、戸塚をやどりとす。

廿七日　程が谷、神奈川、河崎など過て、海のおもてはるゝあなたに筑波山はのかにみゆるなどいへど、老のまなこはいつとなく霞へだてゝさだかならず、ろの山のあたり

こそわが心さしゆく子どものすみかならましとぞ、そゞろになつかしけれど、此度はじめてゆく道なれど、なにとなうればつかなく心やまし、又ふるさとは千山萬水のぞみをうしなふ、兎に角に旅はものうき物と思ひしりぬ、

れはつかな過こしかたも行末もかすみこめたる中空にして品川の宿に入てゆく〳〵人あししげくにぎはひつゝ旗本の諸士馬のりものゝ行粧大路をせましと行ちがひ、市町たからをひらひて人はかへりみる事あたはず、車はめぐる事を得すと班固が西都の賦にかけるもよそならずればゆ、飛甍の雲にそびえ、雉蝶の日にかゝやきたる、細柳營の御城居はまうすもさらなり、侯伯子男の朱門高館、こがねをちりばめ玉をかざりたるさま、いくたび見ても更に目をおどろかし侍り、見ぬもろこしはしらず、聞つたへたる本朝大内裏のむかし、鎌倉室町の中ごろ、安土大坂のちかき繁華とても、今の江戸にたくらべては十分が二三なるべし、れはよそわがみかど六十餘國の中にたぐひなき天府の地どればゆ、されど、かけまくもかしこき東照權現の神慮をめぐらされ、慈眼大師の法智をそへられて御草劍の瑞域なれど、悠久をひさかたの天にひとしく、安寧をあらがねの地に期するなるべし、

むさしのや三葉四葉の殿つくりさかえん代々のかぎりしられず

孝明天皇御遺徳

先帝御製（東久世伯染筆）挿入　全一冊定價金二十五錢　郵税金四錢

恭て按ずるに先朝　孝明天皇は[illegible]才の明君なり不幸にして**事蹟**尚湮滅に属し**聖徳**未だ外に顕れず是れ頗る憾むべしと爲す此書は宸翰秘書及び先朝に奉仕せし雲客月卿諸官人の**實歷談**に依り以て汎く**逸事遺聞**を網羅したるものにして庶幾くは聖徳の萬一を發揮し奉ることを得たりと信ず

此書の一斑を示せるに先づ**御一代**の竟を掲げ編年體を以て降誕より崩御に至るまでの事迹を示し**聰明**の章に於て　先皇の英明絕倫なるを概説し**夙成**の章は御幼時の御言行を示し**[illegible]**の上編は[illegible]擾の事、其下編は皇權回復の事に痛く叡慮を悩されたる事蹟を叙し**孤憤**の章は獨り至尊をして社稷を憂へしむの實情を寫す[illegible]**御[illegible]**は識見卓出の公[illegible]を明にし[illegible]は言路洞開の[illegible]英邁聖徳を輝かし**[illegible]**は禁裡荒廢供御菲薄にして時に或は十兩以下の御座用金に窮し給へる等の例證を示し**仁慈**[illegible]側は[illegible]の御心甚だ厚かりしを明にす、而して前纂に[illegible]遺する能はさりし逸事遺聞は總て之を**雜事**の一章に網羅し以て先帝の聖徳を頌し奉る

東京京橋區築地二丁目廿一番地

發行所　國光社

生田目經德編

標註 雅文消息集 全

●菊版美本
●全一冊
●定價金廿五錢
●郵税四錢

日用消息文の摸範は中古文にとらざれば雅馴なる言詞艷麗なる文章を綴りがたし慶長以來文學の大家古文の學を興してより契仲、眞淵、宣長、千蔭、翁麿、濱臣、春海など名家相繼ぎて斯の學を盛ならしめ國文の書世に出づるもの甚多く消息文の如きもその躰大にとゝのひ雅馴にして艶麗なる好摸範も多くあらはれたりしが其の後また多く世に行はれずなりぬ近來國文の再盛なるに方りて之を學ひ日用の消息に適用するはまことに必要のことなりこの篇專心を用ゐて古人の消息中より高尚にして雅馴なるものを採り四季雜の各部に分ち參考者の便よからんことをはかれり國文を修むるもの一本を坐側にをきて摸範となさば益を得ること必大なるべし。

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 國光社

國光社譯述

獨逸讀本抄譯

定價金貳拾錢
郵税金四錢

獨逸は、教育の最も普及せる國なり、學問の國なり、實業の國なり、教育の主義は彼我國情を異にするも、教科書たる事實の撰擇、序述の文體等、其方法に屬する者に至りては、**玉を琢くの好資料**となすへき者多からんとて、熱心篤實なる教育者諸君は、獨逸讀本の譯述を促せし事、一再にして止まらず、本社も亦斯道の暢發を以て自ら任ずる者なり、豈他山の石たるを期せざらん、寸毫たも國家を裨補せん事、轉輾忘るゝ能はさる所憂勞敢て辭する所にあらず、されは、本書は、獨逸最近の讀本を涉獵し、**粋を拔き精を撰び**勉めて**原文の眞義を發揮**するを主として、抄譯したる者なり、教育者諸君之を得て**座右の好參考**に供すべく、學生諸君之を得て**朝夕の好良友**となすべく、彼の國の**教育の實質を窺知するに於て、百千部の教育說心理論に優れること萬々なり**、若夫れ文の流暢にして趣味多きや否哉、事實の新奇にして實際を遠さからざるや否哉、少年を書か如何に發達せるや否やは讀まん者よく知得べければ、略しつゝ

東京京橋區築地二丁目
二十一番地

發行所　國光社

三輪田眞佐子著

第七版 女子の本分

定價金廿五錢 郵税金六錢

東洋の君子國秀麗端正なる女教自然に存す之を涵養し之を發揮して以て貞淑賢良の婦女を養成し雄大忠誠なる國民の慈母たらしめんこと是れ『女子の本分』の主張する所なり今や江湖の望に應じて第七版の成るを告ぐ苟くも女子教育に志あるものゝ座右一日も缺くべからざる良書たるは世の許す所なり

發行所 國光社 東京京橋區築地二丁目二十一番地

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さす金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價	一冊	十錢
	六冊前金(三ヶ月分)	五十五錢
	十二冊前金(半年分)	壹圓
	全國無遞送料	
廣告料	五號活字廿三字詰一行金二十錢	

明治三十年八月十九日印刷
同年八月二十日發行

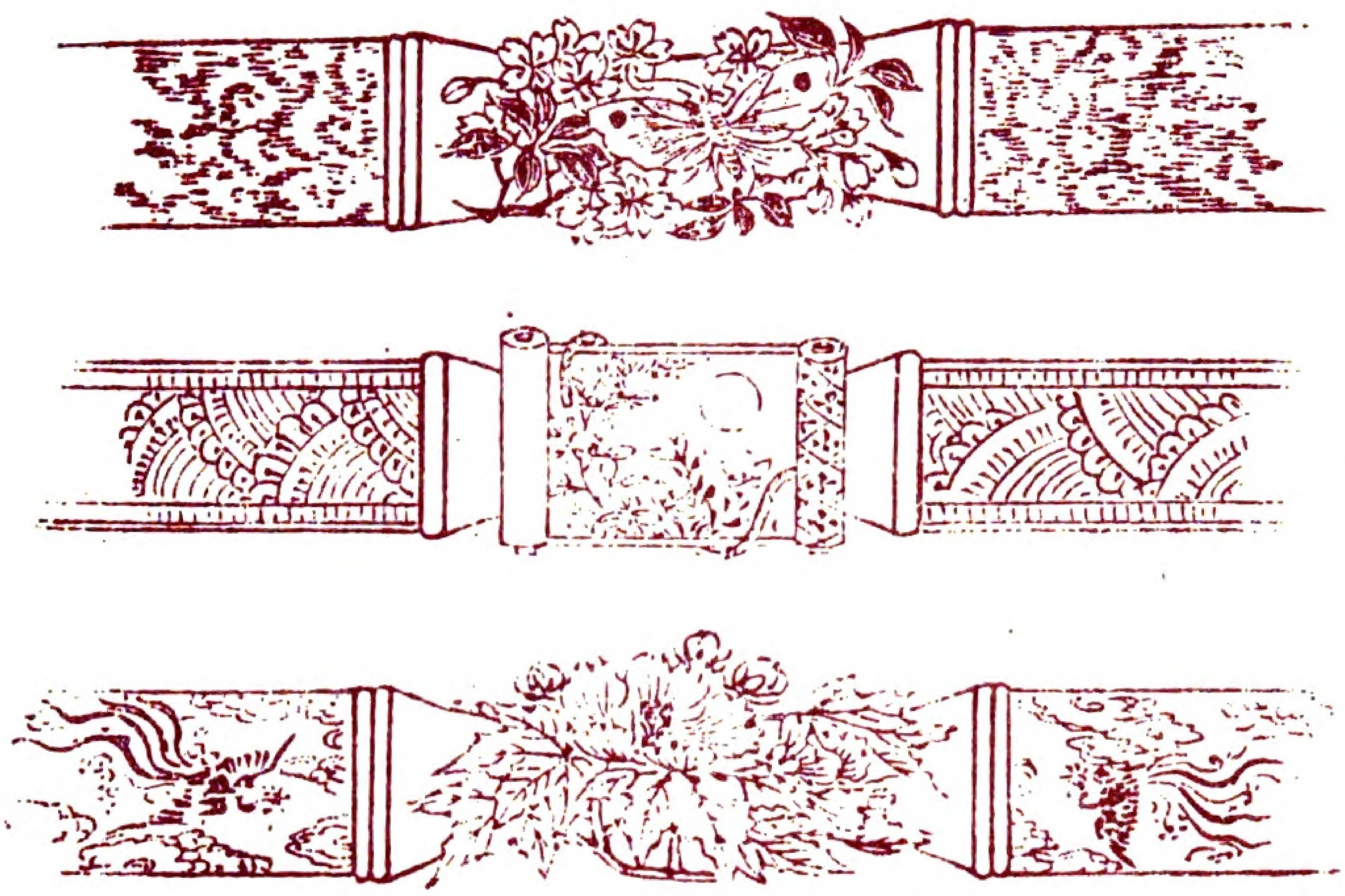
東京京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 川崎直衛

東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地
印刷人 並木良雄

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行所（電話番號本局八八） 國光社

貴婦人用帶締

●野口小蘋女史考案並畫



⊙金、白金、赤銅朧銀等の金屬を用ひて彫刻を施せしもの

甲價六　拾圓
乙價五　拾圓
丙價四拾五圓
丁價四　拾圓
戊價參拾七圓
己價參拾三圓
庚價參拾壹圓
辛價貳拾九圓
壬價貳拾七圓
癸價貳拾五圓

⊙右又はプラチナ地にダイヤモンド、エメラルド、ルユビー、サフアヤ眞珠等の寶石寶玉を裝嵌したるもの

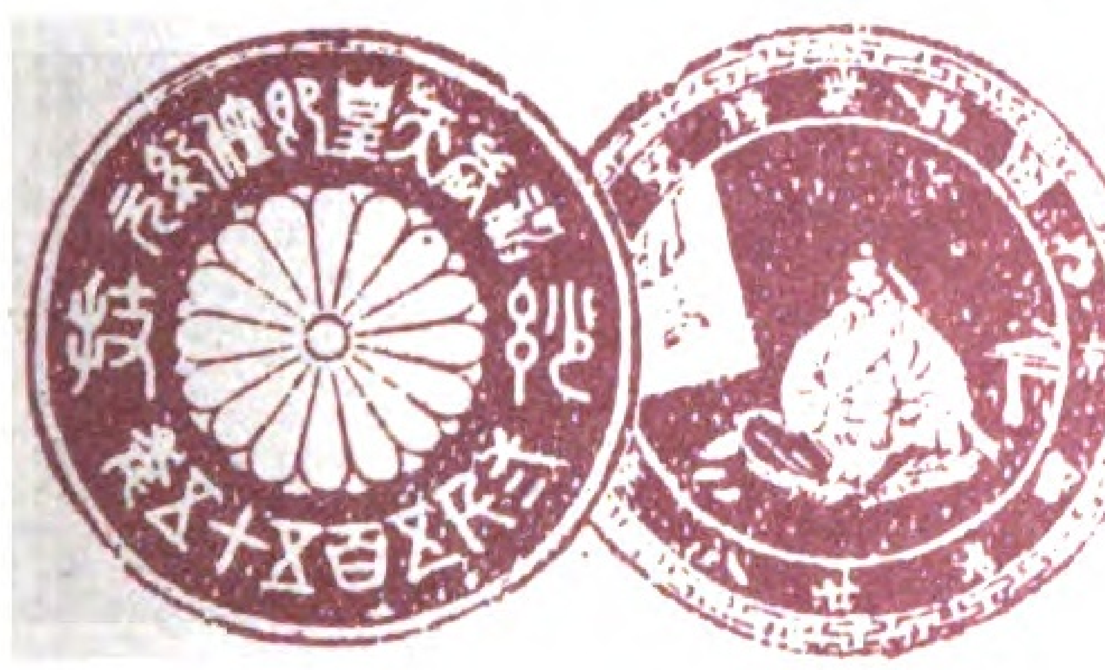
●甲價百二十圓●乙價百圓●丙價八十五圓●丁價七十圓●戊價六十五圓●己價五十圓●庚價四十圓●辛價三十圓●壬價二十圓●癸價十五圓

右の金もいは何れも名工の手に成り紐は織物或は種々の新形又は古代の組方に倣ひたる組打にて其製作都て壯麗にして優美なり尤も彫刻の疎密あるひは寶石の大小に依りて代價にも高下あれは成るへくは車を枉けて弊堂に臨み其現品を御覽じ玉ひ但し遠隔の地なれは郵便にて御注文を下し玉へ代金御送附次第その價に相當の品を精撰して調進し參らせ聊にても御信用に背く事は候はす若し思召に適はざる時は交換し玉ふとも原價を取戻させ玉ふとも御望の隨意に候ふべし其手續ども は屢々新聞紙に廣告したる弊堂店則に詳なり

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八番地

時計及寶玉類
貴金屬美術品　商（電話番號本局三百三十三）天賞堂

東京市神田區小川町十九番地（電話架設中）天賞堂小川町出張所



妙技一等賞牌

大阪市南區心齋橋北詰北ニ入ル（電話七三三）天賞堂大阪出張所

名古屋市本町通玉屋町二丁目十七番戸 天賞堂名古屋出張所

廣島市大手町三丁目六十五番地 天賞堂廣島出張所

熊本市唐人町通上鍛治屋町十番地 天賞堂熊本出張所

長崎市萬歲町上野屋方 天賞堂長崎臨時出張所

北海道小樽色內町越中屋方 天賞堂小樽臨時出張所

（明治二十四年八月四日內務省許可）
（明治二十五年七月十一日遞信省認可）

（印刷所　東京國光社印刷部）